大正元年十月一日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）大正三年三月一日發行第二卷第六號（大正三年二月廿八日印刷納本）

近代思想

三月號

近代思想社
東京府下大久保百人町三五二


日本蓄音器商會の
一大提供
機械三十五號は今回大改良せられオーク材木製ラッパを附て
金三十五圓
新音譜大賣出し
五四 五五 赤紙印 両面盤 浪花節 宇治川先陣（上下） 京山小圓
五六 五七 同 同 静御前（上下） 同 同
一七八三 一七八四 同 義太夫 日吉丸 寺小屋 竹本源太夫
一九八五 一九八六 同 浪花節 安兵衛婿入 五郎正宗 東家楽燕
二二七五 二二七九 黒紙印 両面盤 同 豊臣太閤記 建久曾我 吉田一若
赤紙印 両面 二圓 黒紙印（同）一圓五十錢
新刊 日本蓄音器文句集 一冊定價金壹圓拾錢
レコード文句全部網羅し体裁極めて優美
神奈川縣川崎町 株式會社 日本蓄音器商會 電話川崎四九番



第二卷　第六號

春

春よ、此の年はわが家をも訪れよ、女の子生れたり。

×

生活の苦しさ、されども春よ、戀を持來らばわれに與へよ。

×

君の來る時、われ常に戀にありき、今年の春よ、夙く去れよ。

×

春に逢ふて、黒瞳の人よ、われ先づ君が瞳に光の滿るを思ふ。

×

夫を養ふ女に、戀の我儘あり、妻子を養へず、あはれ、われは。

×

女は生みの惱み、われは生きる苦しみ、生る者に幸ひあれ。

×

一つの新らしき生命の、われは創造者なり、春よ、春よ。

×

春は來れり、子等よ、眼を開きて、新らしき世界の光を見よ。

×

ヒロシは父の懷に、シゲリは母の懷に、貧しかれども、春の夜の家。

×

生活の苦しみ、言葉は抽象的なれども、われは此外に言葉を知らざるなり。

—(安成二郎)—

叛逆者の心理

George Palante
大杉榮 抄譯

社會生活の自然の結果でもあり、又疑もなく其進化の中に必須の役目を爲すものではあるが、一般に非社會的と呼ばれてゐる諸種の感情がある。社會的不滿、社會的悲觀、無道德觀、個人主義的若しくば無政府主義的叛逆心等は是れである。而して目下是等の感情は激發狀態に在るやうだ。下には群集の漠然たる精神の中に勃興し、上には先驅者的思想家の中に、背反と否定との明白なる意志となつて確立せられてゐる。

或る與へられたる時に於て此の叛逆の精力の爆發を決定する外的及び社會的原因は種々ある。時と共に、所と共に、社會進化の度と共に變はる。之れを研究するのは歷史家の仕事であつて、心理學者の仕事ではない。私は此等の諸原因をさし置いて、其の生ぜしめ若しくば引立てる心理狀態に就いて說きたいと思ふ。

先づ此の叛逆者に相反する心理學的型、即ち滿足者、社會的樂觀者に就いて一言しやう。

此の型は一般に人類の群の地盤を爲すものである。有らゆる群集の持前なる樂觀の慾望を表白するものである。先人の型であるが故に、凡人と等しく平凡なるものである。最もよく之れを說明する特質は、平凡の中の平衡と云ふ事である。滿足とは、已むに已まれぬ權力意志もなく、大なる慾望もなく、大なる渴想もなく、智識的情緖的若しくば情熱的の何等の凸彫のない人間である。此の平衡のお蔭で、滿足者は感情及び思想の心底からの衝突を知らない。又其の周圍の餘りに甚しき矛盾をも感受する事が出來ない。

遲鈍なる惰性、强請する事のない假幻的慾望、薄弱なる若しくば緩慢なる想像、人眞似の智慧、之れが滿足者の一般的特性なる心理的財産である。若し此の生れつきのお目出度き平凡の中に、發意心の多少の心積りが起るやうに見えたとすれば、それは此の發意心を殺す敎育の役目をする事である。敎育は總て樂觀的のものである。滿足者の精神を形作る者である。官學的倫理學者はたゆみなく樂天のホザナを音頭とる。

彼等にとつては、道德とは常に、多數者の幸福を得る事に在る。若しくば、更に之れを容易にして、多數者をして自ら幸福なりと信ぜしめる事に在る。滿足者は常に幸福でなければならぬのだ。斯くして社會は其の社會的喜劇が遂には鈍感なる人心の上にも生ぜしむべき欺瞞の印象を打消さす爲めの、注意深い小勘定と、有らゆる種類の小幸福と、自負心の小滿足と、虛榮心の小玩弄物とを以て、其の道をつゝまやかに行く。

されば滿足者の態度は、社會的には、有益である。滿足者は柔順なる動物である。されば滿足者は善良なる一群獸動物である。されば滿足者は、其の首長の恩惠によりて、其の周圍のもの〻友情によりて、報償せられる。

然るに妙な事には、此の滿足者の最も特性的なる感情は、恐らくば恐怖である。滿足者は服從者たると共に不安者である。素

より其の不安は、精悍(エナージック)者の中に、あふるゝ如き生のよどみ涙、活動の痒感となつて現はれるやうな胸の廣い不安ではない。

滿足者の不安は、賤人の不安である、滿足者は其の地位に安んじて、それを變へる事を欲しない。幾分たりとも自らの地位を變へんと欲するものゝ有らゆる所爲、不平者の態度を嫌惡する。お目出度き懦弱の平和に耽つて、發意心が要求する、而して其の舊習と怠惰とを攪亂する、有らゆる變化を恐れる。

要するに滿足者には、社會的小幻像を動かしむべき幕の上の、何等の識見も、又何等の直覺的注視もない。其の智慧は淺薄である。滿足者には識見の用がないのだ。自らを導いて行く注意を、好んで他人に任せてゐるのだ。自分の運命を他人に任せないとしても、之れを慣習に、世評に、格言に任せてゐるのだ。此等のものは彼等にとつて法律の力を有し、而して彼等の智慧は其の有りのまゝの反影に過ぎないのだ。

此の心理狀態の諸特性は、叛逆者の心理狀態の好對稱となるものである。尤も此の叛逆者の中には人眞似的の智慧がないと云ふのではない。夢中になつた羊は、もう決して羊ではない。憶病者は、服從に於て摸倣するが如く、叛逆に於ても摸倣する。其の叛逆の言葉は敎へられた言葉である。其の殺人の所爲は暗示せられた所爲である。彼等は單に暗示者である。特種の激情者である。しかし此の摸倣的又は暗示的叛逆者の外に猶本能的、氣質的、生活意志的叛逆者がある。

吾々の社會的評價は總て主觀的のものである。Remy de Gourmont も之れを云つた如く、『社會的幸福とか不幸とか云ふ實際の狀態はないのだ。實際には知る事の出來ない或る社會狀態の表樣(レプレゼンテーション)があるのみだ。』社會的世界は、各人の意識の奥の方で、其の縮圖を畫かれる。しかし其の縮圖は總て同一の方法で畫かれるのではない。社會的現實と、各人の意識の感じたる印象との間には、各人の感性と智性とが交つてゐる。此の各人の知性は、其社會的折光差の指數とも稱し得べきものである。即ち外から來る光線を、其の知性の差に從つて、屈折し偏向せしめる。

社會的世界の此の智的表樣の價値と利害とは、各人の知性の力と敎養とに從つて變はる。Balzac の如き、Renan の如き、或は Taine の如き社會的表樣もある。又は Howais 氏の如き夫れもある。或は又、譬へば Bakounine の如き、總破壞の狂暴なる使徒の夫れもある。

要するに叛逆者の知的氣質を特性づけるものは、此等の人々に於ける分解的才能(ディソシエート・ファカルテ)の優越である。此の點に於て予は、R. de Gourmont 氏が明白にした思想を思出さゞるを得ない。眞理殊に社會的眞理は、決して單純なるものではない。多くの抽象的觀念の綜合たる、譬へば共和黨の題目たる自由平等博愛と云ふも、若しくば一抽象觀念と具体的要素との綜合たる、譬へば個人又は團体の愛着或は利害と云ふも、決して社會的眞理は分解する事の出來ない論理的本體ではない。往々互に調和する事の出來ない要素の混合である、寄木細工である。最も多くの場合は、觀念が抽象的狀態に止らずして、利害とか偏見とか云ふ外來的要素に因て變造せられた場合である。されば此等の社會的眞理は、夫れ自身の中に其の敵を住はせ、夫れ自身の中に自分の矛盾を含むものである。此等の眞理の消滅を見ん

が爲には、之を其の諸要素を一つ々々に離す、分析的解剖に附すれば足りるのだ。

されば矛盾は社會的思想の布を織るものである。多數の人々は此の矛盾を氣にとめない。彼等の論理は强請する所がない。或る特種の誘導が、宗教界に關する不條理に對して、彼等をして憤怒せしめる事はある。しかし政治的及び經濟的信條の不條理に對しては、彼等は巧みに示談して了ふ。然るに他の種の人々は、何事にも容易に滿足しない。社會的智慧のいろ〳〵な道の雜つたそしてつぎはぎの織物を、卑下の眼を以てきれ〴〵に引裂く事を愼しむ。

知性の分解的勢力は、心理學に於て對稱の聯想と稱する、此の特種の聯想の優越を豫想する。滿足者の人眞似的智慧は、眞理として與へられた事に對して、決して謀反しない。彼等はそれを毀損する事なしに、加ふる事もなく、減ずる事もなしに、只それを反覆する。之に反して他の種の人々に於ては、或る社會的眞理が其の前に現はるゝや否や、直ちに之れと反對の肯定が可能であると云ふ事を思ひ起す。彼等に在つては、反對の可能と云ふ觀念が、常に其の心の中に在る。普通人に在つては、之れは天(あま)の邪鬼(じやく)と稱する忌むべき習癖に墮する。優良人に在つては、之れは社會的繰言の單調を脫せしめ、而して自由に偶發(コンティンゼンス)の野の中へ飛び出さしめる、實り多き覺醒となる。對稱の聯想は、殊に能動的なる或る種の想像に變つて了ふ。何んとなれば Ridot 氏の言に據れば、『想像は感情と同じく、極度の速力を以て、諸種の矛盾の間を運動する。』

此の飛び廻り動き廻る想像が、Ribot 氏の社會的想像と名づけた甚だ奇妙なる想像である。大叛逆者に在つては、此の想像は、社會的夢想及び表象の爛熳たる花盛りとなり、又は社會及び人生の未聞の解釋となつて現はれる。時として此の想像は類推(アナロジー)によつて先立たれる事がある。類推は、價値の傳習的順序を破壞する、諸事實若しくば諸思想の意外の對照を發見せしめる。此の方法は Nietzsche に於て常に見る事が出來る。又社會的想像は放射作用によつて先立たれる事がある。此の場合に於ては、社會的想像は往々激情によつて元氣づけられる。いたましき社會的的衝突、荒い社會的現實との一接觸は、諸感情及び諸想像の引力中心となり、其處から其等の諸感情と諸想像とが活潑なる束となつて放射する。Ribot 氏が星座(コンステラション)の名の下に示した想像、又 Stendhal が晶化てふ名高き名の下に示したのに似た想像が是れである。

社會的想像は、時として美に結晶すると共に、又醜にも結晶する。社會的悲觀者及び叛逆者に在つては、社會的世界は薄暗い不吉な色合を帶びる。奇怪な忌々しい形狀を呈する。Nietzsche の『理想製造工場』に就いての、あの恐ろしい妄想は即ち是れである。斯うなると社會は、監獄のやうに、仕置場のやうに、卑怯者と嘘吐きの待合所のやうに、僞善と臆病との雜踏所のやうに見えるのだ。

此の想像の自由なる飛び廻りは、叛逆者をして、Nietzscheの發想に從へば、『非歷史的』のものたらしめる。滿足者又は社會的樂觀者の特性は、與へられたる社會的現實に對する盲從である、過度なる歷史的觀念である。凡人は社會的事實の底深い偶發性に就いての、甚だ漠然たる感情しか持たない。彼等は、習慣及び傳習によつて祝聖された事の必然と合理とを、こゝろ

よく信ずる。或る社會狀態の組織の中に入つて來た、偶然の、一時的の、習俗的の、人工的の、だまし畵的の事の大部分に疑惑を夾まない。弱い怠け者の彼等が利用する事を知らない、しかし征服的意志のある他の人々は自分の目的の爲めに服從せしめ自由にする事を知つてゐる、自己の朧げなる可能性に疑惑を夾まない。彼等は大能の御手と稱して、それには服從しなければならぬ、至上の社會的論理のある事を信じてゐる。之れに反して叛逆者は、社會的偶發性に對する活潑なる感情を持つてゐる。過度なる歴史尊重に對して、事實又は所謂歴史的論理の前に膝まづく事に對して、反抗する。

叛逆者に取つては、社會的眞理とは、全く出來上つた、小動るぎもしない、而してそれに對して手出しの出來ない、或物ではない。生と同じく、不確かな、逃げ勝ちな眞理、生成して行く眞理なのである。社會的眞理は吾々自身に屬する。而して或る意味に於ては、吾々自身の作物であり、吾々自身の行爲である。更に大叛逆者とは、未知の世界の中へ一跳びに跳んで行く、非歴史的人物である。叛逆者は眞理に就いての其の特種なる概念を持つてゐる。彼れの眞理は、全く生の浸み込んだ眞理、糖力（エナージー）と活動との活躍たる眞理である。

蓋し此の活動と精力とは、叛逆者の土臺である。叛逆者は必ず傳習的眞理の分解者である。社會的虛僞の被物を笑ひながら取りのける想像者である、直覺者である。而して又殊に精悍者である、戰鬪者である。但し精力には反動的と能動的との二形式があるので此處にも亦 Nietzsche と共に二種の叛逆者を區別する事が出來る。即ち Nietzsche が懷恨者と稱した反動的叛逆者、復讐的叛逆者と、未だ何等の加害をも受けたる事なき攻勢的叛逆者、自發的反逆者是である。此後者は害惡を蒙らず、復讐の要もなく、只生の新しき形式を實現せしめ、理想に詳言すれば人格の擴大せる反影に勝利を得しめんとする單純なる渴想によつて、現存の社會制度に反抗して立つ强者である。

猶此の後者は精力の優越なる型を代表する、偉大なる型の叛逆者である。奴隸叛逆の特性たる卑賤にして懷恨的なる激情を知らざる、高等にして美的なる生活意志の人である。Nietzsche は云つた。『一時懷恨が貴人（ノーブルマン）にとりつく事があるとするも、それは瞬間の反動によつて結了し消滅する。怨恨も以て毒害する能はざるが故である。且つ甚だ多くの場合に於て、此の怨恨も全く爆發すると云ふ事はない。尤も弱者や無力者には之れも避け難い事ではあるが。長い間敵や又は其の惡業を眞面目にとる事が出來ないと云ふのが、自らの發達の充實し、且つ成形的な更生的なそして癒治的な力を溢れる程に持つてゐる强者の特徵である。近代世界に於ける其の好適例は、彼の Mirabeau である。彼れは其の蒙むりたる、而して單に自ら忘れたりとの故を以て許す可らざる、侮辱の記憶を持たなかつた。』

反動的叛逆者に在つては、其の憎む相手を怨恨の色を以て描く、先きに記したるが如き悲觀的想像が支配してゐる。けれども第二の型の叛逆者に在つては、それが淸澄な、調身的な、そして創造的な、想像である。此處に於て叛逆者は、社會的價値の創造者、新しき眞理、新しき正義の建設者となる。若し今其の名を擧げやうとなれば、Rousseau の如き、又 Bakounine の如きは

恐らくは反動的叛逆者を代表者する者であらう。Rousseau の天才の中には、激情的なそして奥底に懷恨的なものがある事を思ひ出して戴きたい。而して Carlyle の如き Tolstoi の如き又は Nietzsche 如きは、精悍なる創造的叛逆者を代表する者であらうけれども恐らくは亦、同時に反動的にして又能動的なる、破壞的にして建設的なる一折衷的型をも區別しなければなるまい。そして Proudhon の如き Ibsen の如きは、恐らくは此の最後の態度を代表するものであらう。

そこで次には、叛逆者の態度と之れに近い或者、先づ社會的悲觀者の態度とに就いて一言其の區別を說かなければならぬ。社會的悲觀者は叛逆者と全く接近してはゐるが、しかし又甚だ異なつてもゐる。絕對的の社會的悲觀者は盲目的なる宇宙的生活意志の恐ろしい發現だと見る、一切の社會的活動や生活を否定するまでに到る。叛逆者に在つては、反動的叛逆者もさうであるが生活意志は、少なくとも反抗と憎惡の精力として、肯定される。悲觀者に在つては、生活意志が世界の舞臺から引退いて了う。此の態度の根原は、社會的醜惡と接觸すれば直ちに壓しつぶされて了う、纖細なそして銳敏な感性に在るものと思はれる。時としては又、恐らくは Challemel-Lacour の場合に於けるが如く、氣短かな傲慢に在るものとも思はれる。要するに社會的悲觀は生活意志なる叛逆本能とは反對に、本質上禁慾主義である。禁慾主義は亦、私が實際的無政府主義者と稱する者の態度である。此の實際的無政府主義者とは、其の非社會的叛逆の感情を、其の個人的存在の中に極限して、之れを他人にまでも分有せしめんとする努力を輕侮するものを云ふ。Remy de Gourmont 氏は、極めて巧みに、此の型を略說してゐる。『無政府主義者は、損害を蒙むる事なくして爲し得れば、法律や又は有らゆる社會的義務を、いつでも遠慮なく逃れる。其の個人に係る事に於ては、權威を否認し又破壞する。今日の複雜なる社會に於て、人が自由になり得る丈の自由を自ら得やうとする。此型の外に又、一切の服從に對する自己の憎惡を、他人にまでも無理强いしやうとする無政府主義者がある。』

禁慾主義は又、美的生活若しくば社會的ディレッタンティズムとも稱し得べき、或る思想の態度でもある。私にとつては、此の社會的ディレッタンティズムは、社會的美的悲觀說の一變種である。社會的ディレッタンは、社會的世界を、美若しくば魂の現象として殊に醜の夫れとして、感受する。そして此の醜の現象に對しては、寃物に襲はれた惡夢に對するが如き、幽靈的價値を附するに過ぎない。非道德主義も亦、此處に擧げられればならぬ、一思想的態度である。殊に Nietzsche の徒の態度たる此の態度は、今吾々の間に其の時を得て來た。之れは、紳士閥的道德のいぢけ切つた木をしつかりと縛りつけて培養する小むづかしい園丁の老婆心、僞善的道德論、義務論に對する反動である。非道德論者は、Nietzsche 流の道德系統を以て、Kant 及び其他の至上命令に代へた。而して彼の紳士閥道德を以て、凡人及び弱者が智者及び强者に對する復讐方法の發明に過ぎないとした。非道德論者にとつては彼の道德の木は美に於てよりは寧ろ醜に於て茂り榮えたのだ。社會的生活意志の泥深い底に生えた此の木の枝は、社會的僞善の毒深い液汁によつて膨れ上り、而して其の影は健全な活潑な精力にとつての致命の傷所である。

又非道德論者は好んで皮肉家である。群集の卑怯なそして愚鈍な笑に反して、皮肉家の笑は、彼れ自身に對する笑、抽象的笑ハムレットの沈默した大きな笑、司祭共によつてドグマとして立てられた卑しむべき利己主義に對する最良の不敬的侮辱的の笑である。道學者共が『性格』のない笑と稱して嘲りつゝも、此上もなく不愉快がる、Swift の笑である。Heine の笑である。

社會的悲觀論、社會的ディレッタンティズム、皮肉主義、非道德主義は、Nietzsche が女性的不滿の名の下に解剖した、一種の奇妙なる不滿の型の變種である。同時に甚だ微妙なる、甚だ底深い、甚だ意味合ひの多い、執拗な、逃げ易い、而して又、其の叛逆的不安に於て止る事を知らぬ甚だ恐るべき、甚だ活動的なる一思想的型である。

然らば社會進化に於ける此の叛逆本能の役目はどんなものであらうか。

叛逆本能は、同時に生活本能（ヴァイタル、インスチンクト）の一形式であり、また智識本能（インスチンクト・オブ・ナレヂ）の一形式である。歴史的進化の流れに於て、此の兩者の間に不可思議なる和解を遂げしむるものである。盲目にして目的のない生活本能は、此の社會と云ふ現象の一切の變化の奥底に伏在する。社會的樂觀論者が、完成と云ふ事を社會進化の或は最初に或は最後に置いたのは、誤謬である。私にとつては、社會的樂天論の二形式たる Schopenhauer のエピゴオンも、Darwin のエピゴオンも、何れも等しく認める事は出來ない。私は歴史は完成を後にも前にも置かない。私は歴史的進化を以て生の定命的な、凄まじい、素晴しい悲劇的消滅としか見ない。

歴史は、人類が其の不安なる進行を追ふて行く、道である。此の旅の始めも終りも雲の中に消えて見えない。此の道の上を、社會的生活意志は、自らを超越せんとし、其の現在ゐる所より先へ、其の現在欲する所より先きへ行かんとして、たゆみなく努めてゐる。時としては此の歩みが遲れる。時としては狂氣に近い程急ぐ。氷河の如き殆んど感ずる事も出來ぬ程の緩慢な進行をする文明もある。之れに反して我が西歐文明は、時として其の大革命の際の如き、雪崩の突如たる墜落か、又は解氷の時の河水の狂亂的漲溢かを思出させる。此の社會的成行に於て、宗教的、社會的及び道德的ドグマは、停滞又は固定の法則である。生活本能が自己の水準を高めんが爲めに、而して一時其の水を停滞せしめたる後不可抗の勢を以て再び其の前進を續けんが爲めに、自用の爲めに造つた堤防である。而して此の堤を破毀して、囚はれたる淀み水を解放せんとするものは、叛逆者である。ドグマの破壞者である。斯くの如くして又、叛逆本能は、智識本能の形式の下に、生活本能の不可思議なる助力者となるのである。

叛逆者に對する世間の待遇は、之れよりして生ずる。智識本能によつて暗黒の表面の上に投ぜられた光明の新しき光線が、傳習や、舊習や、怠惰やの調子を攪亂する。叛逆者は罵詈せられ叱立てられる。

然し之れを要するに叛逆者とは、生の運動の突如なる急迫、前進的跳躍、將來への非歴史的飛躍を企つるものである。されば平凡が勝利を得たる今日に於て、叛逆者の出現が、明日の意外事の爲めに熱心する、賭博本能者によつて歡迎せられるのは此の故である。何となれば此の出現は、歴史の幻劇に於ける恐らくば大に人氣を博すべき何等かの舞臺的活動、何等かの眺望の變化を、信號し又は前兆するものである。

『第一歩』を讀む

安成貞雄

『第一歩』は、相馬御風氏が『最近一ヶ年ばかりの間に書き溜めた感想錄のうちから、特に率直に自分を表白したと思はれるやうなものばかりを集めた』小冊子である。御風氏は序文中に『この一卷によつて自我實現の自由と眞實とを自ら歡び得る事を言明するに躊躇しない。』此の一卷は『私みづからに新しい第一歩を踏み出させる行進序曲を奏するやうなものである。』『私は何よりも私の表白を「一個の物」として取扱はれ度くない。保存され度くない。私と云ふ一個の人間を抽象的に認めて貰ふことすら、私は嫌でならない。』と云つて居る。此の書の性質は、畧々是れでわかるであらう。僕は今、少しく詳しく其内容に立ち入つて、其の特質を見やう。

新潮のXYZ子が云つた如く、御風氏の長所は、現代社會のあらゆる問題、あらゆる事件に對して、直ちに感じて自家の意見を樹て得る點にある。氏は新しい問題の提出者ではないが、新しい問題に對して、常に自家の見解を述べ得る人である。『第一歩』中の感想錄は、大抵他人が提供した新しい問題に對する解釋である。

新しい問題、事件は無數に生起する。是れに即席の解釋を與へ、意見を述べ、且つ自家の特色を保たんとすれば、勢ひ深く思索する遑がなく、且つ異を立てなければならぬ。思索せずして、様々の問題に就いて他人に異議を挾むことになれば、勢ひ矛盾破綻を生ずることになる。『第一歩』が深い思索の結果と、統一とを缺くのは、是れが爲めである。『第一歩』中の感想は、大抵即席の意見御手輕の見解である。而して、專ならざれば精ならずで、大抵は常識的見解を脫しない。當然有すべき場合にも科學的正確を有しない。

有体に言へば、感想の大部分は、少しく鋭利なる反問若しくは內省によつて、自ら消滅すべきものである。『科學の人生化』は、長谷川天溪氏の『人生の科學化』に對する感想であつて、讀賣の日曜附錄に出た當時近代思想社の小集で、僕は直接御

風氏と議論の主題としたものであるが、是れなどは、科學とは何んぞや、人生とは何んぞやと云ふ反問に堪え得るものではない。御風氏は、科學と科學の產物との混同を基礎として議論を進めて居るが、是れを明白に區別すれば、議論は自ら崩れて了ふ。文學以外の智識に乏しい人にとつては、プロージブルな見解と見えるかも知れないが、多少科學に關する智識を有するものには、曖昧で、幼稚である。云はゞ素人脅しである。此の更にいゝ例は、毒藥の壺の中の、南國人と北國人とを比較して虛無思想と理想主義との發生を說明した三四章に見られる。此の見解は、本間久雄氏をして卓見なりと感服せしめ、同氏の『遊蕩見』及び『死の勝利』の主人公の比較論に基礎を與へたものであるが、御風氏の見解は不幸にして、ハイエロロヂーにも、民族心理學上にも、確實なる基礎を有せざるものである。漫然たる常識的智識からさう見えるだけである。御風氏が、此の見解を得た後、それが事實に合するかと考へ直せば、直ちに、それが尤もらしい獨斷に過ぎないことを發見したに相違ない。御風氏は『南國の人にとりては與へられたる自然の恩惠を如何に享樂しやうかと云ふことが問題である。併し北國の人にとりては與へられたる自然を如何に改造しようかと云ふことが問題である』と云つたのは、或る條件を附して是認し得られるが、其の後の『前者は官能に於いて豊かであるが、思想に於いて貧しい。後者は官能に於いて貧しいが、內生活に於いて豊かである。』と云ふのは、證據なき斷定である。『印度思想の豊富』と云ふ一事だけでも、是の斷定を破碎して餘りあるではないか。御風氏は更に進んで、官能的悅樂の豊富と夫れを享受する力の不足との矛盾から、南方の厭世主義が起ると云つて居るが、是で、氏は、官能と、官能的悅樂の對稱との混同を示し、且つ事實に合しない斷定を下して居る。佛敎の厭世思想は、印度の征服者たる所謂アールヤ人と、被征服者たるドラビデア人との間に生じた等級（カスト）が、神聖にして不可變なものであるとされた社會の產物である。露國の虛無的思想も亦、露國の政治が產んだものである。夫れが理想主義となつた事實を、御風氏は、『嚴密な意味に於いて北方に眞の虛無思想は有り得ない。北方の虛無思想

は、凡てその奥底に理想主義を秘めて居る虚無思想である。行く所迄行けば、理想主義的光明思想と變るべき虛無思想である。』と斷じて居る。是れだけでは、北方にあり得べからざる虛無思想が、贋物にもせよ何故に生じたか、それを行く所まで行かしめるものが何物であるかゞ不明である。而して此の不明は、御風氏が、思想の發生の原因を、若しくは、其の決定力を單に自然のみに歸せんとしたが爲めである。自然のみが思想の決定力であるならば、釋迦時代と同じ自然の印度に、獨立運動の如き最も現世的な理想主義が起る筈がないではないか。

御風氏が、思想の決定力としての社會狀態に關する所謂常識以上の精確なる智識を缺く明證は、同じく毒藥の壺の中の『トルストイをして貧民の家に生れしめたならば、ダスタエフスキーをして貴族の家に生れしめたならば、而してバアナードショウをしてロシア人と生れしめたならば。』と云ふ獨立した一章に見られる。是れは、例へば『御風氏をして支那に生れしめたならば』と云ふと同じく、極めて幼稚にして無意味なことである。個人を、全く其の時代、周圍、境遇から引き離して、御風氏の言を借りて云へば、『固定した一個の人間を抽象的に認め』る時にのみ發せらるゝ感想である。貴族の家を離れて、貧乏官吏の家を離れて、愛蘭土生れを離れて、トルストイなく、ダスタイエフスキーなく、ショウがない。江南の橘は江北の枳殼である。其の人物を形成する要素を捨てゝ人物を考へるのは、人物を殺すことである。本誌前號の、御風氏の社會と個人との關係に就ての議論が曖昧模稜なのは、斯る考へ方の爲めである。

御風氏が、序文中に、自ら嫌だと云つた考へ方を、他人に適用して居るのは、前に指摘した矛盾の一例である。矛盾は誰れにもある。それは、大したことではない。併し、矛盾を意識するか否かは、思索家の生命の存ずる所である。思想の統一は、矛盾の意識から始まる。即席の意見「手輕の見解、異を立てる必要は、御風氏に、幾多の矛盾を齎らした。」『單調を破らうとする努力』の結論の『單調を破らうとする人間の努力は死の力に對する生の力の戰である。永遠に續いて絕えざる最も大なる戰である。此の永遠に續いて絕えざるべき最も大な

る戰に於いて、吾々は常に最も勇敢なる奮鬪者であらなければならぬのである。』と云ふ句と、『全的生活』の中の、『私は初めから現存の社會を破壞して行かなければならぬとか、世と戰はなければならぬとか云ふ事は考へのうちに入れ度くない。愛しなければとか、戰はなければとか云ふ固定した觀念には私は固着したくない。』と云ふ句とは、如何に解すれば矛盾しないであらうか。更に後者と本誌前號の社會と個人に關する議論とは、如何にして調和さすべきであらうか。

斯の矛盾は、時として、同一の文章中にも現はれる。そして論理の破綻を來たして居る。『生命力の直感』は、早稻田文學へ出た當時、荒畑が批評した通り、新活力論者が夙く科學的に證明せんとした所を、直感したと云ふに過ぎないものであるが、御風氏が『二三本の樹木の生命と私自らの生命との不可思議な渾融を直觀し得た』『突如として全体意識の上に一種の嚴肅なショックを感じた』が爲めに、『病になやまされつゝある「我」の奥に何ものゝ力を以つてしても動かす事の出來ぬ權威ある生命我の活躍を直觀し得た』が爲めに、『決して再び「生命とは何ぞや」の愚問を繰り返さない』と誓つたのは、不思議な論理である。『生命とは何んぞや』と云ふ問題は、生命の起原、性質、分量等に關する問題である。樹木と人間の生命との不可思議な渾融は、生命の性質の一部に過ぎない。故に、渾融の直觀だけでは、『生命とは何んぞや』と云ふ問題が解釋し盡されては居ない。決して『愚問』と成り終つては居ない。若し愚問だとすれば御風氏は、はじめから渾融の直觀によつて解釋される程度しか疑はなかつたか、若しくは、それで滿足して引き下つたか、何れかでなければならぬ。生命の起原と云ふ如き、智的な疑問は、はじめから問はなかつたものと見なければならぬ。是れと關連して、不思議に思はれることは、御風氏が、其の直觀を批評し、解剖しないことである。御風氏が生命を直觀したのは、病中であつた。故綱島梁川氏が、見神の實驗を經驗したのは、同じく病中であつた。吾々には、此の類似點だけでも、生活力の減少と體温の昂進若しくは降下と、直觀との關係に關する疑問を起さしむるに十分である。其の研究が肉体の衰弱と、直感に一定の關係があつ

て、或る程度迄肉体を衰弱せしむれば、機械的に直感し得ると云ふ結論に導きはしないかと疑はしめるに十分である。

斯る疑問は、或は、『生命の力の直感』一篇の出産を妨げるものであらう。併し、御風氏の見解をして、即席、御手輕通俗に終らしむるのは、此の解剖、批評、疑問の缺乏でなければならぬ。確實なる證據を要する問題事件に關する御風氏の意見が、屢々吾々にはらはらさせるのは、實に是れが爲めである。時事新報の評者は、御風氏の『表現的生活』を評して、表現に急なるよりは、蘊蓄せよと云つた。併し、思想を社會の財寶とするのには表現して貰うよりほかにない。僕は、御風氏に、出しても減じない財寶を出すに吝ならざらんことを望むが、それと共に、第二歩を移す前に、先づ其の足場を堅固にせられんことを祈る。

■藝術座では、三月の下旬に、トルストイの『復活』と、外にイプセン物を、有樂座で上場するそうである、

ショウの警句

寒村生

×

自由は責任を意味する。大低の人のこれを恐怖するのは、蓋し是れが爲めのみ

×

僞善は、眞理が虚僞に拂へる敬禮である。

×

社會的進步の實現は、新制度を舊制度に置き換ゆることだ。而して一切の制度は、それに對する從屬の義務の承認を包含するのだから、進步は一步毎に、現存の義務の拒絕を包含する。

×

金を作れ！さすれば、君を紳士と呼ばうとする爲めに、全國家が陰謀を企らむに違ひない。

×

紳士や貴夫人方は、犬小舍の內に友達を有たうとはするが、臺所の內に友達を有たうとはしない。

×

慈善は猶ほ好色の如し。それは、その厭ふやうな風をして居る惡事で、腹を肥すものである。

×

怜悧な人間は、彼れ自身を世の中に適應させ、愚かな人間は、世の中を彼れ自身に適應させやうと努力する。故に一切の進歩は、愚かな人間に據れるものである。

×

牢獄内に於て、最も心配苦勞して居る者は、實に典獄その人である。

×

醜く、不幸なる世界に於ては、最も富める者の購ひ得るものは、醜惡と不幸の外に無い。

×

警察官に對する恐怖が、正直に擬らはしい如く、屈従は動もすれば従順に擬らふ。

×

近世的紳士は、必然に彼の祖國の敵である。戰時に於てさへも、彼は祖國を守る爲に戰はうとはしない。只、その國利を刧掠する彼の力が、外國人の手に移るのを妨げる爲に戰ふのみである。斯くの如き戰士にして猶且つ愛國者たらせば、一片の骨を相爭ふ犬は、正しく愛獸者と稱すべきである。

×

●

世界はその古き蒸瀛機關と、發動機とを除く。然し乍ら、その古き偏見、その古き道德、その古き宗敎、及びその古き政治的制度をば除かぬ。

×

醜惡と、不幸とから脱れんとするその努力によつて、富者は却つて、その兩方を強めるのである。

×

吾々はその小賣を犯罪と稱し、その卸し賣を刑法と云ふ。

×

罪人は法律の手に因ては死なぬ。彼等は、他の人間の手に因て死ぬのだ。

×

木造の偶像が百姓の祈禱に答へないと、百姓はそれを打つ。肉と血の偶像が文明人を滿足させないと、彼はその首を刎ねて了ふ。

寢臺の上にて

この一篇をQ氏に寄す

哀果生

かうして寢てゐるものは實に樂だなあ！世の中に寢るほど樂はなかりけり、うき世のばかゞおきて働くといふが、まつたくその通りだ。とにかくかうして體をぐつたりと横にしておくのは、立つたり座つたりしてゐるよりも、よけいに地球の引力に屈從してゐるのだからな。體をぐつたりと横にしてゐるのは、地球の運行をできるだけ障害しないで、それと一緒になつてゐるのだ。引力に反抗をしないのだ。反抗をしないといふことが一ばん樂なことだね。一身の安逸、人生はそれだね。憲政だとか立憲國だとかいつたところで、それは要するに表面の名義だけさ、とゞのつまりはやつぱり專制なのだ。屈從、屈從、——おい、だれかゐないかい？この布團をかけてくれ、手を出すのも面倒だ。おい！あゝ、呼ぶのも面倒だな。しかし寒くて仕やうがない。おゝ、降る降る。おれは雪がすきだ。あゝして、どんどんと下へ下へ降るのを見てゐると、いかにも氣が安まる。水蒸氣のもや〳〵と日光の中にのぼるのを見てもおれは苦痛を感じるのだからね、上へ上へとあがるのを見るのはそれがどんなものでもおれには面倒だ。もつと降れ、もつと降れ——イヤ、もつと降れなんて思ふのさへ面倒だ、かつてに落ちて來るだけのことなのだ、雪よ、雪よ。

なか〳〵日が暮れないなあ！おれは時計を見てゐると氣の毒になる。それでも三十分までは針が上から下へおりてくるので、それほど苦痛を感じないが、三十分から六十分までは、あの長い針がうんさうんさと下から上へあがつてゆくので、いかにも退儀らしく思はれる。昔の時計には紐のさきにフンドウがついてゐて、朝から晩まで上から下へとそれがさがつてくるやうなのがある。あの方が見てゐて氣が樂だ。いや時計などをかけておくのが抑も面倒だ、おい、この枕もとの時計をそつちへ持つていつてくれ！あゝ、そんなことを言

ふのも面倒だ。うるさいなあ、しよつちゆうカチンカチンと音がして！おい、だれかゐな……おれはおゝの聲を聞くのさへ面倒になつた。

Xが來た。よくあいつらは人をたづねる氣になれるなあ！洋服をきて、靴をはいて、電車にのつて、おりて、あるいて、門を開けて、玄關に立つて、『おいでになりますか？』などゝ聞いて、靴をぬいで、はしごをあがつて、挨拶をして、まづ『今日は寒いねえ、』とか、『どうだね、このごろは？』などゝ言つて、――どうでもいゝぢやないか。寒いのは寒いと感じる自身が寒いのだ、寒いねえと言つて二人が一しよに寒いと感じるなんて面倒も實に面倒だ。『最近文學者達がバカに鼻息があらいね、街に出でよだとか、慾求だとか、革命だとか、それでゐて自身は書齋の中にひつ込んで書冊にばかりかぢりついてゐるのだ――あれぢや書齋から街上へでなくて、書齋から監獄へだ。』こんなことをXは言つたな。よけいなことさ。そんなことはどうでもいゝのだ――おゝ寒い、おい布團、もうすこし上の方へかかつてくれ。

だが、ちつと脊骨がいたいぞ。あんまり寢てゐると、やつぱり疲れるらしい。さうかといつて、寢返りをするのも面倒だ。この寢臺がぐるりとひつくり返つてくれるといゝのだが、――イヤ、とにかく、かうして、生きてゐるからこそ寢るなんていふことにもなるのだ。いつそ死ぬかな？今死ぬとなると、毒藥をのむかピストルをぶつぱなさなきやならない。毒藥、ピストル、そんなものを持つてこさせるのも面倒だ。ヤ、うんとしよ、まあかうして、せめては一ト思ひに布團だけかけて、すつぽりと冠つて、眼や耳や鼻をできるだけ外界と交渉させないことだ。おや？おれは今まで何か考へてゐたな、何か一人言をいつてゐたな、バカなやつ！そんな一人言をいふのさへ面倒だと思はないのか！

■廿二日の夜、近代思想社は久しぶりで、初めて生活と藝術社と一緒に、築地の精養軒で晩餐會を開いた。來會者二十餘名、その中の八名は、雪が降るのにまた家を換て、十二時近くまで喋べり散らした。

胡麻鹽頭

貝塚澁六

■二月七日、三人づれでチヨツト箱根まで遊びに行つて紳士の眞似事をして見た。

■先づ塔の澤の環翠樓に宿つた。湯に入つて碁を打つて、鮪の刺身に鮟鱇鍋か何かで、一パイやつて、それから又湯に入つて暖たまつて寢た。二時頃でもあつたらうか、フト眼がさめた。便所に行つて其の序でに又一度湯に入つて寢た。

■こゝでの話に、先年出水の時、とう／＼橋が落ちて、旅館福住が流されたりした事を聞いた。そして其時、此山に住んで居た愚童和尚が、天然のストライキで都の貴女紳士が、糧食を斷たれて、此の山中に封じこめられたのは痛快だつたと、頻りに痛快がつて居た事を思ひだした。

■翌朝自働車で山を登つた。連の一紳士は自働車といふ者に乘るのは是が初めてだといふ。僕の如きは則ち然らず、去年既に一回乘つた事があるのである。然し其の僕と雖も、箱根の峻坂が自働車で苦もなく超せる樣になつて居るとは、實は此時初めて知つたのである。

■何しろ自働車の乘心地は甚だいゝ。若し是を人力車で行かうものなら、直接我が爲に他人の汗を絞らせるのが、如何にも辛い心地がする。と云つて、自分の足を働かせるとすると、それは又云ふまでもなく一層辛い。そこになると器械の力は有がたいもので、自働車の運轉手は宛んど山坂といふ者を無視して居る。然し此の自働車が出來た爲に、此山の車夫がよほど仕事を奪ばれて困つて居ると聞いて見れば、何の事やら譯が分らなくなつて來るが、マアそんな事は紳士として考ふべき筈の事でないから好い加減に忘れて置く。

■先達て、此邊の宿引連中が小田原に遊びに行つて、夜ふけて自働車のロハ乘で以て山の上に歸る途中、醉に乘じてフザケちらした結果でゞもあつたらう、此の險しい坂道から何百間の谷底に自働車を走り落して、人も車も大怪我をしたと云ふ話を聞いた。それが若しか藝妓を連れたダダラ大盡でゞもあつたら、地下（に居るか何處に居るか知らないが）の愚童をして一段の痛快を叫ばしめた事であらうにと、ツイ紳士らしくない事を考へた。

■風は寒いが景氣はいゝ。自働車は富士見亭の前を過ぎて大平臺に來た。林泉寺の前を通る。即ち愚童の居た寺である。僕は曾て彼を、叩けばカチ／＼と音のする、よく枯れた千なり瓢箪に喩へた事がある。小作りのカツチリしたあの和尚が、腰衣を着て、高足駄をはいて、ツカ／＼と此山を降りて來た姿が眼に浮ぶ。又彼が微笑を含んで、箱根名物の大きな丸盆に、達磨を彫つて居た時の姿が思いだされる。然しこんな事は紳士間の話題にならない。僕は默つて獨り考へて居た。

■自働車は宮の下を過ぎて小涌谷に登つた。途に三河屋といふ大旅館の門内に進み入つた。旅館の女共は恭々しく三紳士の來臨を出迎へた。

■こゝは昨夜の宿に比して、一層ハイカラの當世風に出來て居る。三紳士の得意想ふべしである。地は既に海拔二千尺、前の峯より彼方の谷にかけての展望が非常に美しい。

■又湯に入つて碁を打つて晝飯を食ふと、急に雪が降つて來た。見る／＼中に二三寸も積つて來る。態とこゝまで雪見に來たとすれば、實に非常な紳士的豪遊である。兎にかく一パイやらざる可らずといふので、

又湯に入つて暖たまつて、今度は西洋料理で夕飯の膳に就いた。

■温泉、懷爐、絹夜具、湯たんぽ、そして外面にはポッカリと雪が積んでゐる。紳士の眞似は、あんまり心持の悪いものではない。

■翌朝、雪は一尺五寸も積もつてゐる。連の一紳士は少し体の加減が悪いので、籠に乘つて下山した。僕と今一人の紳士とは、靴の上に草鞋をはいて出で立つた。全山白皚々の間を半ば飛ぶ樣にして下つたのは、昨日の自働車の登りほど愉快であつた。

■湯本に着いて電車に乘ると、西洋人の若い女が二人と若い男が一人と居た。是は今朝芦の湖から歩いて來たのだといふ。雪、大變面白いです、など、云つて居る。西洋の貴女紳士は中々元氣なものだと感心した。

■『實業の世界』に露伴君の『生産者及生産力』といふ續物の論文が出て居る。一体、露伴君の論文は餘り面白くないので、滅多に讀んだ事がないが、是は題が題だけにチヨット讀んで見たれば、頗る善く譯の分つた事が書いてある。露伴君も萬ざら古代な物識りといふだけではないらしい。

■鷗外君の『大鹽平八郎』を讀んで見た。一揆の首領に對する金箔を餘ほど剝いだといふ趣きがある。僕は前から、何故大鹽が直ぐ あの場で切腹せずに、あちこち逃げあるいたり、潜伏したりしたのだらうかと、其の意味を解しかれて居たが、鷗外君の此の文を讀んで見ても矢張それが分らぬ。鷗外君はそこを何と解釋して此文を書いたのだらう。只何とはなしに生存欲に驅られて、(或は他の理由を以てそこを自ら欺きながら)生きのびられるだけ生きのびたものと見たのであらうか。僕が若し大鹽の事を書くとすれば、(實際書いて見ようと思つた事もあるが)其處の解釋を定めなければ筆の執れぬ樣な氣持がする。

■山本一藏君の死に對する同窓諸氏の感想錄が『早稻田文學』に出て居る。委しくは讀まなかつたが、とりどりに面白い事が書いてある樣だ。そしてザット讀み了つた後、山本君の頗る上品な人であつた事と、同時に可なり我儘な人であつた事とが、稍深く感じられた。

■『へちまの花』第二號は安成貞雄號として、先づ同君の頭髮鬚眉蓬々たる肖像を載せ、同君自身の『輿多話』と題する大々的氣焰と、百瀨晉君の同君に對する非常に面白い感想文と、安成二郎君のアニキを歎へる歌と、僕の同君に與ふる短文と、其外友人諸氏の同君に對する一口評などが載せてある。本誌の讀者諸君には是非御一讀を願ひたい。代金を拂ふ事の面倒なお方には、御申越次第ロハで進上致しても宜しい。

■堺枯川著『不屈のみなし兒』といふ廣告があちこちに出たが、あれはヂッケンスの小説を譯述したもので、『著』ではありません。又『悲劇小説』といふ銘が打つてあるけれども、悲劇といふより寧ろ滑稽諷刺の作物です。此本は發行所の都合上、一体に赤本仕立になつてゐて、譯者は聊か冷汗を流して居る樣な次第ですが、然し内容は曾て都新聞に連載した時のまゝで、大して藥にもならぬが、固より毒になるものでもありません。

■色々手前味噌や未練らしい辯解やらを並べて相濟みませぬが、どうせ文人は自己廣告の生活を送る動物ですから、大目に御覽置を願ひます。

堺氏に答ふ

伊庭孝

自分が一月の本誌に、『馬泥坊に表れたるショウの道德觀』と題した一文を掲載したのに對し、二月號に於て貝塚澁六の堺氏は、自分の論旨に就て反對の意見を述べて居られる。堺氏は有名なショウ通である故、こゝで自分が沈默してゐると、非常に損な立場になるから、一應自分の說の根據となる可き點を開陳して置かうと思ふ。

論爭の點はかうである。社會といふ人間の共同生活の基礎となつてゐる道德的慾情Moral Passion の存在はショウの道德說の根本義であるが、その慾情の存する事に就て、それを素直に解釋して、その慾情あることは人間（個人）の爲めに幸福だとするか、不幸だとするかといふのが論點なのである。堺氏はショウは之を前者の樣に解釋し、自分は後者のやうに解釋してゐるといふのである。そこでショウ作馬泥坊 Shewing up of Blanco Possnet を共同の證據書類として對決しやうといふ別であある。

一月號に掲載した自說の中には、自分は、惡魔の弟子、人及超人等を經過して、馬泥坊に於てショウがその傾向を露したといふやうに書いて置いたつもりである。それは馬泥坊に於ては He 即ち『神』といふ言葉が澤山に用ゐられてゐる事が自分の第一の根據なのである。馬泥坊は自分に道德的慾情を自覺した事を叙して、神のわなにかゝつたのだといつてゐる。

『神は横着者だ、卑怯者だ、陰から貴樣をねらつてゐるのだ。さうして猫が鼠をおもちやにするやうに貴樣をからかつてゐるのだ。貴樣を一時手放して、貴樣に神の繩張から遁れたと思はせて置いて、いきなり貴樣をとつて押へるのだ』（原文第三八五頁第八行――一一行）

『己は神に用がなくなつたから、神にお暇乞をした。そして長い間神なしでやつて來た。處がとうとう捕まつた。己が括り殺される事だけは神も笑つて見てゐられるわけだ』（原文三八五頁第二〇行以下）

『己が馬をとつたのは神が誘惑したのでもなければ惡魔がしたのでもない。己は自分の料簡でとつた。神はそれよりももつと悧口なわなを拵へて己を待伏してゐたのだ』。（原文第〇三八五頁より六行）

『己はどうしてこんな馬鹿になつたんだらう』（原文第三八六頁初行）

これだけの言葉で見ると、馬泥坊は神から離れやうとする努力をしてゐた人間であつたといこと、然るにどうして神の手から遁れる事が出來ずに、神に捕まつてしまつたかといふ事が解る。道德的欲情から脫却する事が出來ないといふ事は彼にとつては不覺なのである。神の手を遁れやうとする努力、及び神の手に捕へられて殺されればならぬ苦痛を描いたこの戯曲は、道德的慾情の桎梏を苦痛と感じてゐる見方としか思へない。

さうして馬泥坊は後段の演說に於て、その立場を更に詳に說明してゐる。以爲く、神は子供を創造し、更に病氣を創造し、病氣に惱んでゐる子供を助ける爲めに、自ら手を下さずして、神から離れやうとしてゐる人間を使役した。而もその人間は子供を助けた爲めに、死刑に處せられる場合になつた。これは神といふものゝ暴戾である。

そこで戯曲中の事件はかうなつてゐる。死刑に處せられた人間は、もともと道德的慾情に擒はれて行つたのであるし、またそれを罪に陷れやうとした證人も一種の道德的慾情に擒はれて證言を取消し、公明正大

なる可き判官も同じく裁判を中止した。これが偉大なる洒落であるといふので、この偉大といふ事を文字通り解釋して、おまけに戯曲の結末の事件のみを考へると道徳的慾情といふものに對しショウが非常に率直な見解を持つてゐるやうに思はれるが、主人公たる馬泥坊の思想を撿し、また偉大なる洒落といふ事を、更に皮肉に考へるときは、人間が道徳的慾情を唯一の索條として、共同生活を作つていく運命が罵倒せられて描いてあるともいへるであらうと、自分は思つたのである。

尤も堺氏自身も告白して居らるゝ如く、ショウの説を解明してゐるといふ條、いつかは自分の性情から割り出した自説の味方に引き入れてゐるのかもしれないが、堺氏の樂天的樂天説よりも、自分の樂　的悲觀説の方が、ショウにも近く、また餘計近代的ではないかとおもふ。

■第一歩を讀む補遺

釋迦が説いたニルヴナの中には、御風氏の所謂虚無の思想が全くない。御風氏が印度の自然の所産だとした佛教は、今日印度に殆ど行はれて居ない。（貞雄）

大久保より

同人

■十九日、まだ寢て居る中に、警視廳から僕に宛てゝ、『記事の件に付質問の廉有之、出頭せらるべし。』といふ端書が來た。で、雪の降る中を態々御出頭に及ぶと、高等課長の前へ呼び出されて『此頃の近代思想は露骨に主義の傳道をやつて居る、こうゴム風船のやうにだんだん膨らがるやうでは、斷然禁止の處置に出るから、續けやうと思つたら、純然たる文藝雜誌に立ち歸れ。』といふ御叱りを蒙むつて立ち歸つた。（寒）

■ゴム風船はいゝれ。幸ひ本號は大ぶ無事穩健だが、さて今後はどうなり行くことやら。どうせ今の所は中味がからつぽだからいゝやうなものゝ、奴さん、うつかり觸つて、かけつ片でもおん面に飛ばぬやう、用心するがいゝよ。（榮）

■毎號相馬君にばかり辛く當る樣で相濟まぬが、どの雜誌を見ても、大抵相馬君の名が見へるのだから。致しかたがない。それに、其の言ふ所が、大杉も云つた如く、吾々が、一辭一句も讀んで居る所であるから、勢ひ一言せざるを得なくなるのである。一面から見れば、是れは、相馬君の活動の多方面なることを證明するものであるから、寧ろ賀すべき事であるかも知れぬ。而して、吾々は、最も吾々と近い所まで來て居る相馬君と論戰するのを最も愉快なりとするものである。相馬君も亦吾々と論戰することを、最も愉快なりとせらるゝに相違ない。

■此の號から雜誌の責任者が、大杉と荒畑の外に安成貞雄と僕と四人になつた。大杉が社長、荒畑が庶務兼會計課長、安成が主筆で、僕それ自身は編輯長として行數計算掛の榮位を忝ふする（二郎）

■宗頁純と云ふ人から僕に宛てゝ長文の質問書を送つて來た。誌上でよりは會つて話したいが、君の所を知らして戴けまいか。

■猶僕は堀保子と共に、此の六日に鎌倉坂の下二二に轉居した。そして社へは寒村一家が、寒村のあとへは二郎一家が來た。僕は毎月一日及び十五日の前後二三日は社或は賣文社にゐる。（榮）

■大杉は此の月初めから下痢をして居たが晩餐會から歸つて以來、非常に惡くなつたそうだ。どうか、何でも無くて呉れゝばいゝがと、心配して居る。（寒）

—一二、二五—

放火犯の死

荒川義英

或る殖民地の駐剳軍の一中隊長の室。中央に大いなる卓、正面に此方をむいて、中隊長が兩手をコメカミのあたりへ當て肱をついてゐる。卓の上には洋酒の罎、コツプ、肉の皿など並ぶ。卓の左右に下士卒一人づゝ、それに凭つて話し合つてゐる。夜、背景窓二つありて外暗し。

中隊長。然しあの男は、成績は好いやうであつたな。

下士A。左様です、私等が始めて受持ちました時から、非常に宜しい成績でありました。

下士B。私はあれを、第一に上等兵に願をふと存じてをりました。あゝ云ふ無口な男でゐて、斥候でも、傳令でも、實に正しく果します。

中隊長。そうだらう、けれ共、俺は今までの經驗から推して、あゝ云ふ顏の男にあまり好い兵卒はないやうに思つたな。實によく間に合ふとお前は云ふ、それは傳達などは必ず、命じた將校より要を得てゐた。――しかし、（詠歎するやうに、獨語のやうに）あゝ俺は何故あれに、總裁の護衛などゝ、飛んでもない役を命じたものだらう。

A。それは何も、大尉殿の罪ではありますまい。

B。誰だつてさう他人の性質を、すつかり飲み込む事は出來ますまいから。

中隊長。（其等の言を聞かずに）俺は最初思つた通り、何故他の者を選ばねかつたらう？俺はあゝ云ふ顏立の者が、一見小利巧に見えて實は不誠實な例を、今までいくらも見て來た。何故俺はあれを選んだらう？――、（低く）もう然し、取返しがつかない。

A。それは大尉殿、大尉殿があれを選ばれたお心持は、よく私にも解つてをりますな。あれは誰が見ましても、好い兵卒としきや見えませんもの。私が隊長殿の位置に居りましたら、屹とあれを選んだでしやうな。

B。隊長殿は今こそ御後悔なさるが、若しあれが全くよく任務を果して、門へ迫る暴徒の中へ驀らに進んで、その幾人かの銃劍でつき刺されて、暴徒のために殺されたとお考へになつて御覽なさい。隊長殿はきつと、特にあれを選んだ事をお喜びになるでしせう。（此の間他の二人は、しきりにフオークを運んでゐる。）何うも之ばかりは、致し方ありませんでしやう。運命でございますから。それに何も、

隊長殿に何の關係もない事は、他人(ひと)はよく存じて居ります。他人は隊長殿の不幸を、深く御同情してゐます。

中隊長。（首をあげて）それはお前の云ふ通りに、世間の者がさう正しい批評をもつてゐて呉れゝば、俺は何も云ふ事はないがな。部下の者が罪を犯したがそれは隊長とは何の係りもない、その部下の勝手な行爲で、そのために已むを得ず或る責任を負つた隊長は氣の毒だと、斯う思つて呉れゝば何も俺は心配はしない。けれ共事實はそう行くまい。

A。然し隊長、世間の者はあゝやつて、總裁の邸へ押しかけて參りました。（笑ふ）

中隊長。ぢやお前は、世間の者は今總裁に反對の聲をあげてゐるから、俺も早くそれを離れろと云ふのか。（やゝ激して）つまり俺に裏切をしろと云ふのか。俺は……。

B。Aの云ふのは、決してさう云ふ理ではございますまい。（Aを顧みても、Aは俯むいてゐる。）

中隊長。兎に角俺はな、今世間全体を敵として闘つても、總裁に叛く事はできないのだ。それは何も俺ばかりではあるまい、BでもAでも勿論さうだらう。（低く）武士ならばさうあるべき筈で、それが當り前なので、何も偉い理ではないのだ。

B。それはもう、私等は總裁から破格の御恩に預かつてをります。（Aは俯むいて獨り食ふ）

中長隊。お前だつてその位の事は、よく判つてゐるだらうが、その破格の恩だなぞとお前が今云つた言がだな、斯うやつて今俺等がうまい酒を飲んで、うまい肉を食べると云ふ事ではなからうな。若し假にお前が、自分は毎夜他の隊の者よりうまい物にありつき、好い生活ができると云ふ事をもつて、それに對する報酬として總裁のために盡すと云ふやうな、卑劣な根生をもつてゐるなら、それは由々しい大事である。

B。（慌てゝ）否え隊長殿、私は決して、そんな卑しい考へをもつてゐる者ではありません。

中隊長。つまり總裁の方針に吾々は賛同する故に、吾々は總裁を扶けてその目的を貫徹しやうと云ふのだ。之は俺の秘密だがな、解るやうに云へばさ。吾々は自分の目的、目的と云へば各人その方法を異にするが、兎に角同胞の幸福を増進するが最後であるのは勿論だ。その目的を全うするために、

吾々は總裁に力を借りるとも、總裁を用ゐるとも、何とでも言はれるな。つまり吾々は極力總裁のために盡せば、それが直ちに吾々の目的を貫く最も好い、早い、近い方法になるのだ。それをよく辨まへてゐて呉れろ。（Aを顧みて）Aもな。

A。（隊長の方を見ず）はあ、よく解りました。

中隊長。それにしても、此の事件は實に處置に困つたものだ。

B。それがでありますな、今申した通り何も隊長殿に於て、そうお困りにならなくて好いやうに存ぜられますな。早く申せば、總裁は何も隊長殿を何う此うお思ひになる理がございませんもの。

中隊長。もうどうか、つまらん慰めは已めて呉れ。俺の頭の中はひつくりかへつて居る。——もう連れて來る筈ではないか？。

放火兵卒、打撲に疲勞しきつて、ぐつたりしてひよろ〳〵歩いて、捕卒に引きづられて來る。三人卓を離れて立ち上り、左手の入口の方へ歩む。犯人立ち止まつて、ぢつと隊長の顔を見つめてゐる。

隊長。（捕卒に）總裁の邸は何うなつた？。

捕卒。只今消し止めました。何分お手くれが致しまして、半分程燒けて終ひました。

中隊長。で、總裁閣下は別に？。

捕卒。閣下はじめ御一同、御別邸の方においでになります。

隊長。勿論皆、そちらを守つてをるだらうな。

捕卒。堅く守つてをります。

隊長。（Bを顧み）お前すぐ行つて呉れ、閣下によくその理を話してな。俺は後からすぐ犯人の始末をして行くと、よく云つて置いて呉れ。すぐ參るのだが、犯人が捕まつて來ると聞いたので、それを始末してから上らうと思つてゐた事をな。そうして犯人は、只今此處にゐると云ふ事もな。好いか。

（B退場、隊長つく〴〵犯人の顔を見て）

隊長。オイ…貴樣はえらい事をして呉れたな。（靜かに）一體貴樣は俺なり、總裁なりに、何う云ふ恨みを持つてゐたのだ？。

犯人。（はつきり顔をあげて）決して恨みなどはもつてゐません。

中隊長。（や丶激して）貴樣も狂人ではあるまい、恨みもない者の邸を燒く奴があるか！。

犯人。私は只だ、多くの移殖民のためにやつた迄です。決して總裁に恨みはありません。

中隊長。貴樣は總裁の邸をやいて、總裁を殺して、それで多くの移殖民が救へると思ふか。

犯人。事實それで、移殖民が此の苛酷から逃れられるとは思ひませんが、私としてあれ以上の方法はございませんでした。私は自分の氣やすめのためにやりました。

中隊長。氣やすめ？では貴樣は何だか解らんが、燒きたいからやいたと云ふのだな。

犯人。その通りであります。

中隊長。今貴樣は、多くの移民を救ふためにと云つたばかりではないか、それにまた自分のためと言ふのか？。

犯人。さうであります。多くの移民を救ひたひと云ふのが初めの目的でありますが、一度そう極めてさへおきましたら、罪を犯す當時は只自分を滿足させるだけで差支へないと考へてやりました。何うかよく、その一寸二重に聞えます申し立てを、了解して頂き度く存じます。

中隊長。理屈は聞かん。しかし貴樣は兵卒として、さう云ふ大罪を犯して心苦しくないか。

犯人。私は何も、進んで放火しやうとしたのではないのです。私は兵營を逃れ出て、總裁の邸へ放火に出かけたのではないのです。私は總裁の方針を元から怪しんでをりましたが、今回のやうにあの護衛の任に當りませんでしたら、未だ〳〵決行は出來兼ねたと思はれます。私は隊長殿が、わざ〳〵私を選ばれました時、何か恐ろしい運命の神が、隊長殿の心の中に宿つたやうに思ひました。

中隊長。それは貴樣の云ふ通り俺もそう思ふ。俺は貴樣を遣る時に、いろ〳〵迷つた。しかしまさか貴樣が、放火をしやうとは思はなかつた。

A。大尉殿、もう過ぎたことは御やめになつた方が宜しいでありませう。

犯人。さうです、大尉殿もう餘りお考へにならない方が宜しく思ひます。それより早く總裁の避難所へ、お出かけなさつた方がようございます。

中隊長。（卓の廻りをぐる〳〵早足に歩き廻り乍ら）皆して俺を責めるな。（低く）しかし貴樣に護衛の任務を與えたのは、確かに此の俺だつたな。確かに。

犯人。大尉殿、それはそう御心配なさらなくつてもようございます。貴郎がいくらお考へになつても、あの時迷つた末でありながら、私をお選びに

なつた理由など、お判りになるものぢやありません。それよりも、早く避難所へお出かけになつた方が宜しいのです。一刻後れゝば、益々御自身の位置が危くなるばかりではありませんか。私を處置する所は他にありますから。貴郎は最早、私を左右なさる職分ではありませんから。

中隊長。(默つて下唇を輕く嚙んで、眸を上へあげて卓の廻りをゆる〳〵歩いてゐる。)

A。貴様は何處へつけた、最初に。

犯人。(次第に元氣な句調になる)何處と云つて、私は寢室近くにやつたのです、さうしなければ、中々飛び出して來ませんからね。

A。では、總裁はぢき出て來たか。

犯人。火が屋根近くまで上ると、皆な同じ裏門の護衛兵が騷ぎ出したんです。(さも愉快さうに)總裁は、もう逃路は中庭へ出るより外はないので、私は芝の土の所へ身を抵くして、赤い火炎の前に總裁の姿が現はれるのを待つてをりました。

A。貴様はその時、無論裝彈してゐたらうな。

犯人。(微笑して)無論ですとも、チャンと!照尺も合せてゐました。

A。それ程貴様は用意をしてゐて、何故當らなかつたのか。貴様は六百メートルを常にあてて居つたではないか。そんな近距離で。

犯人。(やゝ低く)致し方がありません。

A。貴様はむざ〳〵命を捨てゝ、惜しいとは思はぬか?。

犯人。惜しいと云つた所で、助かる方法はないではありませんか。方法がない以上は、どちらにしても結果の同じな以上は、平氣になるより仕方がないのです。

此のとき隊長、イキナリ足を早めて犯人に近づき、嚴然と捕卒に、

中隊長。犯人は俺が請け合つた、向ふへ行つて宜しい!。

犯人は後手に縛せられたまゝ立つて、四方をやゝ氣樂さうに見廻はしてゐる。中隊長はAを一寸手招きして室の左端へつれ行き、ズボンのポケットへ手をつゝこみ乍ら、頻りに小聲で話してゐる。

A。(低く)可愛いさうなやうでもありますな。

中隊長。極つてゐる事だ、俺もお前も同じ心はもつてゐる、然かしさうしなければ方法は立つまい。

A。さうですな、さう極つたらば早い方が宜しいで

しやう、あいつは會議になぞ廻したら喋りますぜ。

中隊長。さうとも。あんな者を會議に廻したら大變だ。（苦笑して）兎に角あいつが、獨りで後から捕へて來たのは事實だらうな。

A。前の話から考へてもさうなやうです。それはもうあいつの他に、捕へた所を見てゐた奴はないらしいのですな。あいつがあゝ云ふ正直な男ですから、群集の中を押し分けて、急いで引つぱつて來たんでしやう。

中隊長。兎に角、あいつが馬鹿力で抑へつけたから好いやうなもの丶、あれが普通の男で、組み打ちでも始めて多數寄つて來るやうででもあつたら、方法がつかなくなつたな。――いや飛んでもない奴が裏切をしたものだ。

A。ほんとです、兎に角置いて來ます、早くやつた方が好いですな。旅團本部の方から取りに來るのは、間もありませんから。

Aは犯人の繩を引いて、ドアを押して去らうとする。

犯人。早く本當の判決の渡るやうにして下さい。

A。ぢきだ。

去る。中隊長一人。

中隊長。（卓の周圍を廻り乍ら）然し之で兎に角安心だ。Bの奴も馬鹿者で、俺がひどく屈托でもしてゐるやうに思つてゐる。Aのやうな惡黨でも困つたものだ、しかしもう彼奴の機嫌を損ねる事はできなくなつた。此れを知る者はAだけだ、大丈夫安心して居られる。――自殺とはうまい考案を立てやがつたな、Aの奴も。（やゝ微笑、なほ歩き廻る）自殺…いや自殺するさ、あの位の事をする志士はな。馬鹿でなけりや疑ふ者はあるまい。（卓へ就いて）ごれ進退伺ひか？早く書いて置かう。彼奴が云つた通り、全く一刻も早い方が好い。――可愛いい奴だ、偉い奴だ。然し又哀れな奴だな。仕方がないさ。

引き出しから紙を出す。A登場。

中隊長。（近く身をよせてAを見つめ）大丈夫だらうな。

A。大丈夫ですとも。それも絞め殺しでもして、毒藥自殺だなぞと申し立てるのなら、醫者も承知しますまいが。毒藥で死んだ者を、毒藥自殺と云ふのですもの、少しも不審の起らう筈がありません。

中隊長。志士は柔しくしてゐるかい。

A。ゐますとも、（笑つて）非常に喜こんでゐます。蒲團をやつたんですからな。私を信じきつてゐます

よ。――それよりお出掛けになつた方が宜しいでしやう。

中隊長。すぐ出かけるとしやう、早いが好いからな。一方を始末しても、遲れて感情を害した日には何にもならんからな。

立つて外套をとつて着、劍をさげ、帽子をかぶる。眞面目な鋭い目つきで、對手をぐつと白眼み。

中隊長。此方の生死にかゝはるぞ、お互の。しつかりやつて呉れ！

A。大丈夫です。

緊張した目と目を合せて、暫らくして無言に寄つて握手する。中隊長は無言で足早く去る。それをぢつと見送つて、Aは暫らく無言で棒のやうに立つてゐたが、やがてポケットから小さい壜を出して、一寸見てスグ元の所へしまふ。

A。もう好い時刻だな、遲れたら此方が終りだ。

微笑して急速力で左端へ走り、ドアをあけて出で行かふとする。幕。

（三年二月七日）

■一讀を乞ふ　（若宮卯之助著）

著者が實業之世界、ナショナル等で公にしてた政論、時事問題論、人物論を集めたものである。著者は世の普く知る如く、學殖と識見とに於いて極めて高い地位を占めて居る。此の書は、其の一の證據である。本書を通じて吾々は、當代の學者論客の侏儒を見る。流行の人物の身の上調べに慊らぬ吾々は、特に著者の人物論中に、卓れたゝののあるを見る。一讀のみで終らるべきものではない。（貞）（定價五十五錢京橋木挽町六丁目ナショナル社）

■『叛逆者の心理』に就て

パラント氏はニイチエ流の社會學者として、佛蘭西の思想界に相應の地位を占めてゐる人である。此文は最初雜誌 Mercure de France (Zuin 1902) に掲げ、後其著Combat pour l'Individu (Félix Alcan, paris, 1904) に他の諸論文と共に收めてある。僕等自身の現實たる及び理想たる叛逆者の心理を說いたものとしては多少の物足りない感じもするが、しかし現代の所謂先驅者的思想家を解剖したものとしては甚だ面白いものだと思ふ。（譯者）

人間屠殺所

ラムスズス作
佐藤綠葉譯

七　血と鐵

その朝ぢう、吾々は一滴の水をも得る事が出來ずに、太陽に射られながら行進した。此地方には水が少なかつた。それに數週間雨が降らなかつた。吾々の舌は焦げつき、吾々の咽喉は燃えた。丁度眞晝頃、吾々が農地を進んで行つた時に、そこで吾々は少しばかり殘つてゐる汚ない水を見つけ出した。其水はまだ咽喉に屆かない中に、舌の上ですつかり蒸發して了つたやうに思はれた。それから吾々は限りなく進んで行つた。それ故吾々は初めて吾々にあはふとして唸る大砲の響きを聽いた時には、殆ど救はれたやうな感じがした。

砲撃は次第に烈しくなつて來た。そこで吾々は直ちに主要道路を離れて小徑を取つた。吾々は早足で突進した。吾々の顏は渇くのと熱さとで紅くなつた。縱隊は濃い砂塵で覆はれた。吾々は水のかはりに、吾々の舌に砂塵を味はつた。砂塵は恰も麥粉のやうに厚く吾々の頰に積つた。

吾々は一語も無く進んで行つた。生橋が兩側の眺めを遮つた。重い足音、行囊、黑いカタカタいふ小皿、肩げてゐる銃などの外には何物も無い。――ムニムサンに押し進む事とそれから砂塵……。やがて誰かゞ石に躓いて引つくり返つた。その樣子は恰も彼が其前方の男の背中へ落ちて行くやうに見えた……併しそれを見て誰も笑ふ者はなかつた――吾々は絶えず二列で進んで行つた。

――折々、生橋の裂目を通り過ぎる時に、吾々は廣い野原を進んで行く散兵線を瞥見する事が出來た――やがて停る處へ來た……留れ！立てへ銃！そこで私は廣い野へ出るために生橋の裂目を這ひ越えた……五歩の間隔をとる散兵の命令が下つた……。長く廣がつた散兵線は、銃を裝塡して進んで行つた……吾々の前方には綠の野が見えるばかりである。其中程に明かに黃色い芥子の畑がきらめいてゐる。吾々の前方に、丁度吾々の正面と相對して、暗い森がある……そして敵の痕跡すらも見る事が出來ない。吾々の右翼では、

彼等は既に前進運動を起してゐる。吾々の左翼では、散兵等は恰も此時生橋を破つて、攻撃線を擴げる爲に來た處である。

空には絶えず重くるしい響がきこえる。

私は彼等が何處へ砲擊してゐるのか見る事が出來なかつた。又私は彼等が何を砲擊してゐるのか分らなかつた。空には鐵の雷鳴が轟いてゐた。其音は私の胸のまわりに鳴る環のやうに近かつた。私は自分の胸が張りつめた傳響板のやうに轟いてゐるのを明かに意識した――

地上には何があるのか？

鞭の鳴るやうな音がそこゝから聽こえて來た……其音は非常に鋭くて、隔つてゐて、又斷續的で……恰も射的場から來るやうであつた……。

やがて――私のすぐそばで一人の男が仆れた。その銃の上に仆れた。そしてじつと靜まつて、決して再び動かなかつた……頭を打たれたのだ。腦を射貫かれたのであつた……・それで鞭の鳴るやうな音の意味が分つた。之れは彼方の森からくるのである。そこには敵の狙擊兵が隱れてゐて、其森の緣に散らばつて吾々に向つて射擊を初めたのである。

其次はどうなるだらう？

伏せ――目標前方――遮蔽物に寄れ！

併し何の命令もない。吾々はさながら之等の彈丸が吾等に何の關係も無いやうに、些しの躊躇もなく森に向つて突進した。狙擊兵の射擊はそれほど烈しくはなかつた。吾々は擊たなかつた。敵とは十分に接近するには、まだ餘程離れてゐた。

遙か彼方に、敵の銃口が眞直に吾々を差してゐるといふ事を感ずるものは、甚だ不愉快な感じであつた。吾々は初めて戰場に出た日に、さながら馬鹿者のやうに、出來るだけ早く、そして無恰好をして進んで行つた。

私は前へ進みながら、振り返つて後ろを見た。私の後ろには新らしい散兵線が出來て、後から後から進んで來た――後から進擊をつゞけんが爲である。

吾々の散兵線の後ろに地を這うてる者は何だらう？……そこにも一人、あちらにも一人――それは實に不思議にそして奇妙に見えた。彼等は射擊線の外へ這ひ出してゐるのである。私は彼等の

ひとりが突然立ち上らうとする處を見た。其男は兩手に銃を摑んで、其銃の重さで自分自身を引つくり返したやうに見えた。ついで彼は其腕を擴げて、後ろへ仆れて、其手を遠くへ投げ出した。稍々隔つた處に……彼の手はまだ草の中にバタバタをしてゐた。私は恰も迷はされた者のやうに、足は前へ進んで行きながら、後ろの方を眺めてゐた。

が、突然森の中で何物かゞ鳴り出した。そして大きな目醒時計が驅け出したやうにブップッといふ音が起つた。

「伏せ。」

吾々は腹を下にして一齊に伏した。恰も吾々はもう殺されたやうであつた。誰も皆それが何であるかといふ事を知つてゐた。敵は森の中に機關銃を隱してゐるのである。そして彼等は吾々に向つて發砲したのである。私は私の心臟が自分の肋骨にコツンと打ち當つたやうに感じた。一個の機關砲は一個中隊に伯仲する、と、秋の演習に機關砲で敵兵を殘らず掃蕩した後に、一人の故參兵が私に説明した事がある。

此次はどうなるだらう?

注意して、首をあげずに、私は後ろを振り返つた。吾々の後ろにも亦、吾々に接近して散兵線があつた。彼等もまた地上に見えないやうに、草の中に身を隱してゐた。たゞ射擊區域の外にある者だけが尙ほ前進をつゞけてゐるのみである。

吾々は退却するのだらうか?吾々は攻擊するのだらうか?

其時射擊の命令が下つた。命令は忽ちに部隊から部隊へ傳へられた。

「急ぎ打て!森の中!」

然り、とは云へ吾々は何に向つて打つたらいゝのだらう?伏してゐるので、狙擊兵の影すら見る事は出來ない。彼等は吾々から何等の損害をも被らぬだらう。そしていつでも勝手に樹立の中に消えて了ふだらう。併し機關砲は――彼等は確實な目的のために樹の葉の中に隱して置いた。

吾々の中隊長は、私から僅に五步を隔つる草の中に伏して、肘で其身體を支へて、熱心に双眼鏡で眺めて居た。私は彼の心にこびり付いてゐる物を知つた。彼は美くしい立派な若者である。彼の

爲には吾々灰色の古時計と雖も、火の中へでも入つて行かう。何となれば彼は他の青年士官のやうに、肩で風を斬つたり、人を鼻であしらつたりする事なく、吾々に向つても人が人に對する態度をとるからである。それから或時、私が後衛として行進してゐた時に、吾々はリリエンクローンの小說に就て話しあつた。その時から彼は常に私の眼に、恰もそれ等の戰爭の書の中から拔け出して來た者のやうに映つた。彼は最初の月桂冠を得んとして非常に燃えてゐるのである。彼は双眼鏡の燒點をあげたり下げたりして、頸を伸ばして眺めるけれども、それでも敵の影をも發見する事が出來ないのである。そして吾々は空しく森の中に發砲した。何か打つたとすれば、樹の葉か小鳥でも打ち落したに過ぎないのである。

「大樫の近く、下生(したば)への右。」

誰か其階級にある者の一人が呶鳴つた。

私は其個所に眼をくばつた。けれども何物をも見る事は出來なかつた。

私は再び私の周圍に小銃の轟きをきいた。併し遙か隔つてゐる何處かで、鐵の低い奏樂の中へ、明かに長く鳴り渡る喇叭の音が起つた。それは神經のやうに、叉鐵の壁に對する腦のやうに顫へた。

後ろの方では、右翼に當つて——彼等は駈け足で進んでくる。そして彼方からは連發銃が狂氣のやうに鳴つてゐる。

「中隊立てエ！前へ！」

それは吾々の運命から來た……中隊長は劒を振りかざして走つて行く。……私はまだ伏してゐたが、殆ど自動的に、右の膝を身体の下に引き寄せた……私の左右の兵士も亦立ち上つた。そして中隊長につゞいて突進した……身体が痛む！私の背嚢は私の頸の後ろに片寄つてゐる……が、私は右の手に銃を持つて飛び起きて、足の力の能ふかぎり驅け出した。

併し吾々が立ち上つた時、森の中の機關砲が呟き初めた。そして吾等の列内へ鉛の雨を注ぎかけた。私の右に、左に、友達が泣き聲をだして、突つ張つて、地の上に仆れた。

「伏せ！急ぎ打て！」

全線は伏した。そして吾々は再び森の中へ發砲した。而も敵の影すら捕へる事が出來なかつた。

一本の手さへ吾々に向つてあげられず、一人の眼さへ吾々を挑む者は無かつた。森は、綠の森は、たつた一人の顏をもあらはさず、遙か彼方から吾々を屠り殺すのである。

私の右にも左にも、連發銃の音が絶えず鳴つてゐる。その物凄い嘲るやうな音は、私の血を狂はせ、私をして眼の前に紅い幻を描かせる。私は鱗甲の鎧と瞼甲の盔（かぶと）とを見た……鐙の上に高く突つ立つた騎士は、森の中から突進して來た。そして昔は向ふ見ずの乘り手であつた私は、鞍の上に飛び乘つた――私の廣刄の劍は閃々ときらめいて、朝の風に接吻した――それを振り上げて、雷霆の如く彼等に突進した。多くの眼が私の方へ投げられ、そして多くの手が混戰のためにあげられた――一撃また一撃、胸と胸とを、青年の誇り、男性の力を以て……は、は、は、は――一体どうしたのだ？馬は何處に居るのか、乘手は何處へ消えたのだ？吾々は人に對つて攻撃を加へてゐるのではない。機械が吾々に向つてゐるのだ。そして機械は吾々の肉の中に勝利を得てゐるのだ。機械は吾々の血管から血を汲み出して、一バケツ位つゝ舐めて了ふのである。既に打たれて、吾々の後ろの刈草の中に打ち仆されてゐる人々は、その傷のために身をもがいてゐる。併も尙ほ且つ彼等の多くは吾々の後ろで競爭をつゞけてゐる――若い、健康な人間の身体を、機械によつて屠らんがために。

「立て！前へ！驅け足！」

華々しい、若い中隊長が突進する……彼は其劍を無茶苦茶に頭の上で振つてゐる……畫家に見せるべき光景だ。私はその後について突進した……彼の歡聲が私の耳にきこえる……その時華々しい幻が眼の前に搖れ動く……劍が其握つて居る手から飛んだ――中隊長は短い堅い切株に躓いて、仰向けに引つくり返つた……で、私は彼を追ひ越した……私は森の中からくる氣味の惡い呟きの外には何の音もきく事が出來なかつた……。私は鉛の彈丸が吾々の列内に降り注ぎ、右に左に人間が打ち仆されるといふことを、私は初めて文字通りに知つた。……「伏せ！急ぎ打て！」……私は前方に身を投げた。私の銃は用意してある……何故命令が來ないのだらう？中

隊長からは何の叫びも來ない。誰からも何の叫びも來ない………最も近い者でも優に二十歩の彼方にある………其次の者は更に彼方にゐる………吾々はたゞ三人だけである……。

第一線は切株の中で打ち仆されたのである……此次はどうなるだらう？大地は吾々の後ろで生きて來た……そしてカタ〳〵と鳴り、喘ぎ、叫んでゐる………森は再び物凄く轟き出す……彼等はそこに横はつて、辛うじて呼吸してゐる……一語をも交さない……銃は塡めてある……發砲又發砲………それは第六及び第七中隊である……彼等は吾々の間隙を補充したのである。

「立てへ！馳け足！」

頭が先方へ引かれる、と、身体がそれに從つて、射擊範圍へ突進する。そして眼を貪るやうに地の上に付けて、吾々が身を投げ付ける時のたゝめに最も近い礮山を探さうとするやうな風をして突進する。「伏せ！」といふ昂奮した聲が飛び越すやうに聞こえる時に、吾々も亦恰も打ち倒されたやうに伏す。そして次第に吾々に近づいてくる人殺しの森を眺める………「立て！馳け足！」敵は打つてるのか打たないのか解らない………下生への中から、其後ろから——そこから來るのだ………そこから彈丸の雨が來るのだ………そこの白い落葉松の幹の間から、鉛の光が吾々に對つて跳り出すのだ………その向ふに、綠の障壁の後ろに、人殺しが座つてゐて、そこから吾々の手や足を身體から射放すのである。吾々を殺す人殺しを殺せ。そいつをずだ〳〵に引き裂け、彼奴が吾々を引き裂くやうに。

「立て！馳け足！」

身体は暴風雨の渦卷の中に荒れ廻る——森、森！最後の筋肉迄も尙ほ其森に向つて突つ張つてゐる……恰も魂が肉体から自由に飛び出すと、肉体がその後を追ふやうに——森に向つて……射貫かれて孔のあいた肺も尙ほ走つてゐる。彈丸の爲に篩ひのやうになつた內臟まで、尙ほ之れに向つて突進する……若しも頭を擊たれない者は、更に一度飛躍して進み、若しも倒れた時は、四つ這ひになつて——森に向つて突進する……。

どうしたのだらう？

突然深い靜けさが落ちた……。

機關砲が沈默した！

一發の射擊も起らない。一條の砲火も噴き出さない……そこに——下生への中にさら〳〵と鳴る物音が起つた……高い處の樹の枝はお互に狂氣のやうに搖れてゐる。見よ！何物かゞ森の中を急いでゐる。無理に押し進み且つ引つ張つてゐる——今や、よく云へば、彼等は彼等の貴い機關砲を吾々から救はうとしてゐるのである。

や！や！地は鈍く轟き、吾々の足の下で震へてゐる……觀呼の叫び、組合はせた銃、それ等は吾々の後ろから來た人々から起つたのである………吾等の總豫備隊は最後の追擊に向つた……彼等は一團のモッブのやうに——工兵や、狙擊兵や、銃兵などが一緒になつて、突進した……ひとりの背の高い工兵が松の上を躍り越えた——其時松は彼の眼が如何に輝いてゐるかを見た……。立て、彼等につゞけ……そこには荒野がある………そこには防禦工事がある……其工事の中に這入つて、手と足とで這ひ上れ……何處に彼等はゐるのだ？何處に？——何處に？……そこにある樅の樹の側に……が彼等はやがて消え去るだらう——深い銀色の林の間を越えて、綠色の山毛欅の葉を通して、太陽は之れ等の山に輝き、血に渴する者は熱狂して、まつしぐらに下生への中を突進する——やがて、何かしら吾々の眼の前を、非常に滑稽に身をもがきながら行く者がある。樹や下生への間をうね〳〵と巧みに絡まつてゆく……何かしら鐵の中から伸びたやうに、機關砲にからまつてゐる物がある……。は、は！——遙か彼方に馬が待つてゐる……。

「放せ！勝手な方へ行かせろ——放せ！」

併し彼等は放さないだらう……彼等の馬は既に下生への中を縫ひ步いた……車はもう挽き革で張りつめてある……やがて彼等は其大砲を車の中へ投げ込むだらう……そして其あとは………。私は疲れて了つた——樹木は私をめぐつて踊つてゐる……。私は自分の足を樹木の足許で見付けた……。死んでゐる！死んでゐる！彼等はこゝへ來た吾々の物である。そして盲目になつて橫はつてゐるのである。背中や頸は銃劍に貫かれて、ごちや〳〵になつて散らかつてゐる……。私は身体を引いた。一人の若者、まだほんの少年が、

腹這ひになつて、投げ出した銃をしつかり握つてゐる……そこへ突然一人の男が突進して來た――それは帽子も被らない彼の田舍者で、其顏は怒りのためにゆがんでゐた……少年は彼を防がうとして其傷いてゐる手をひろげた。彼の下頤は少し動いたけれども、その口からは聲が出なかつた。はつと思ふ間に銃劍は彼の胸を貫いた……初めは彼の右の胸を貫いた。其時少年の切り裂かれた左の手は銃劍の刄を摑んで、殺されながらもそれを心臓から引き拔かうとするやうに、しつかりと銃劍にしがみ付いた……一突き！一引き！………血はその銃劍につゞいて噴き出した……そして心臓は落ち葉の中に最後の喘ぎをつゞけた………。

あたりには、森の褐色のカアペットの上に、多くの人が仆れてゐる……。

併し機關砲はまだ生きてゐて、機關砲に對して血々噴き出し、肉を消費してゐた……。防禦工事に用ゆる器具を以て……斧を以て彼等は機關砲に馳せ向ひ、その銃身に打撃を加へた。死人を噴き出すレルルトは、恰も負傷せる如くに叫んだ……砲筒は破れた……水は流れ出した……そして車は空中に跳ね飛んだ。捩ぢれた金具、車の輻、彈丸の帶金などは、地上に落ち散つた。併し吾々の熱した血が冷えるまで、之等の金具を打ち叩き、且つ蹈みにじつた……。

やがて喜び溢れる叫び聲の中に、萬歲の叫びが轟き起つた。喇叭や軍樂が鳴り出した。これが戰場に於ける死である！これが戰爭に於ける兵士の氣狂ひめいた喜びである。植えられた鋼鐵に對して露はな胸を以て攻撃し――鐵の壁に向つて軟らかいむき出しの腦を投げ出す處の兵士の喜びである。かゝる大げさな人を無感覺にする方法で、前途ある虫けら共は撲滅されるのである。今度の戰爭に於ては、吾々は虫けら以上には考へられないのである。

眼くらみ、心病んで、吾々は機關砲を見つめた。地上に落ち散つてゐる鐵や鋼鐵は、吾々に向つて詐りに滿ちた眼をしばたゝいた。

八　沼澤

其日の午前中、吾々は遠方に於ける大砲の轟き

や、小銃の響きなどを聽いた。吾々の聯隊はそこゝから進軍した。戰鬪は益々近づいて來た。吾々は、何時砲火の下に立つかも知れないといふ事を豫期した。そこで吾々は再び退却して、吾々の攻撃を發展せしむべき新らしい塲所を求めた。傳達せらるゝ命令はいづれも矛盾してゐるやうで、強い不安の感じは吾々の魂の上に禾病のやうに感ぜられ、將校も下士卒も皆神經的となつた。遂に吾々は隘路の中に進み入つた。其左右の急な傾斜には樹木が深く繁つてゐた。總ての物は悉く銜を含んだ。吾々は雨にぬれて、木苺やエニシダなどの下生への中を突き進んだ。それ等の樹にはまだ綠の莢がぶら下つてゐた。折々見へるものは、綠の屋根と綠の壁のみであつた。

とう／＼空がはつきりと吾々の上に擴がつた時に、吾々は一層のび／＼と息をついた。

吾々は今や綠の牧場についたのである。そしてそれを横ぎつて眞直に進んで行つた。併しそれでもまだ敵軍の何者をも見る事は出來なかつた。鐵砲の音さへもやんで了つて、前よりも一層遠く隔つた。恰も吾々は知らない遠國へ來たやうに思はれた。そして――そこへ吾々は來たのである。間もなく吾々は吾々の脚下の土地が非常に軟かくなつた事に氣が付いた。一足毎に水が滲み上つてくるのである。若しもこのまゝ前進する時は、吾々は正しく沼澤の眞中に陷つて了うだらう。

吾々の周圍を寂寥が支配するに至つたのはそれが爲である。

地面が手におへなくなつた。

右も左も、總て沼澤ならぬは無くなつた。一面に廣い水面ならぬは無くなつた。その深さは何人も推測し得ず、又果して徒渉し得るかどうか、何人も語り得る者は無かつた。

縦隊の先頭はもう頭を廻らした。そして吾々は鼠落しから脫れ出でんために、隘路に向つて吾々の足をかへした。

やがて牧場の中程に達した。

「留れ！小隊つくれ！」

中隊は集つた。士官達は一個所に集つて評定を初めた。吾々は感覺を失つたやうな氣持がした。私の横にゐた軍曹は、軍服の袖を損じて了つたが、狂人か盲目のやうに毅然として何事か呪つてゐ

た。私は瞑想に耽つて、樹木や下生への繁つてゐるい丶加減の高さを見つめてゐた。そして若しも吾々が隘路まで退却して、奥深く進んだ時に、敵が吾々の左右に殺倒したならどんなに面白からうなど丶考へてゐた――一人も生きて返る者はあるまい――チウトブルゲル森林の戰鬪が私の心に浮んだ――私はそこにあるものが樫か山毛欅であつたならどうだらうなど丶想像した――。其時突然下生への中から輝き閃めく物があつた。大空は恰も吾々の上に落ちか丶るやうにゴウ／＼と搖れた………。

「伏せ！」恐れの叫びがそこ丶から起つた。顫へながら、吾々は這ひつくばつた………吾々の頭の上を、吾々の肉に向つて怒號する何物かゞ驅け通つた………。次には何が起るだらう？立て、彼等に向つて突擊せよ！眞直に大砲に向つて突擊せよ。吾々の肉と血を以て其恐ろしい口を窒息せしめよといふにきまつてゐる。

「立て！立てへ！」

大尉が吾々の處へ駈けて來た。鐵の息吹きは恰も萬力のやうに、吾々をしつかりと地に押しつけた………。

お前の首をあげて見ろ。

今！

今！

すると――あ丶！

大空の圓天井は吾々の上に裂けた。そして上から地上に噴き落ちて來る。そこに生命が横つて、地の上で苦しんでゐる。地面を這つてゐた手は、今やめちや／＼になつた空中に空しく握りしめてゐる。私は再び私の足をあげた………。私は打たれなかつた。併し私の横で飛び上つた男は――地の上に平たく仆れて、破れた聲で叫んだ。彼は其冑で以てしつかりと地に這ひ付いてゐるやうであつた。そして再び自由にはなれないやうに見えた。身体それ自身は死んで、僅に手と足とがまだ生きてゐた。多くの手や足が、亂暴に空中で働いてゐた。

「立て！立てへ！驅け足進め！」

誰かの聲が吾々の耳にわめき込んだ。吾々は最早吾々に叫んでゐる者の誰であるかを知らなかつた。吾々は何處の陣地から彼等が叫んでゐるのか

知らなかつた……。吾々は吾々の足で跳ねた。吾々は大尉を見棄て、眞紅に負傷してゐる者を見棄てた。そして立ち上つて驅け出した。榴彈と競走すべく、赤裸な生命を的に突進した。併し榴彈の足は吾々の足に追ひ付いた。彼等は吾々の背後から吾々を捕へて、至る處で眼に見えない箭で打ち倒した。兵士はそれが爲に仆れて、血だらけになつて無二無三にころがつた。併し吾々は引き裂かれ、粉碎された身体を越えて、筋斗返りをする身体を越へて、右をも左をも眺めずに、どん〳〵突進した。吾々は走つた。走りながら首を縮めた。吾々は首を深く肩の間に引いた。あらゆる者が次の瞬間には、其首が後ろから肩の間より飛び去るだらうと思つたからである。

鐵の眼は後ろから吾々を睨めてゐる。沼澤！沼澤！此考へが突飛私の心の中に頭をあげた。吾々は眞直に沼澤に向つて盲目的に突進してゐるのである。僅に今二十歩——否先頭は既にそこに達した。そして其恐ろしい事には氣が付かずに、其中へ躍り込んだ——水が高く飛び散つた——今や——今や何が起つたが？彼等の足はしつかりと吸ひ付けられた——彼等は前方へ引つくり返つた——彼等はどうかして起き直らうと思つて這つた——銃は彼等の手から飛んで了つた——そして前方、水の中へ彼等は引き込まれた——そして吾々の踵に接近して後ろから來た味方は立ちどまつた——武裝した、氣の狂つた群集が……。

「後へ！後へ！」

併しあらゆる人が、何をしてゐるのか意識しないやうになつた。吾々の眼は、恐れのためにキョト〳〵してゐるが、それでも吾々は前方を見た。死は冷たい息を吾々の後ろから頸に吹きかけてゐる。

ごぶ〳〵した水の中で負傷した身体はのたうち廻り、そして肺だけで生きてゐる。多くの人間の身体は水の庭でもがいてゐる。死は吾々の身体を他の岸に追ひ寄せた。誰でも打たれた者は見え無くなつて了ふ。彼等は吾々の後ろからひた押しに押しているからである。水は既に吾々の腕の下まで來た。併し吾々の足の下に堅い底があつた。眞に底は吾々を摑み吾々の足にまとひ付く事が出來た。水は其齒と爪とで亂暴に吾々の肉を嚙む事が

出來た。併し吾々を下から引き込もうとする事は出來るだらうか、吾々はそれを亂暴に踏み付けた。死人の肩が水の中から現はれたが、再び下へ引き込まれて消えて了つた。溺れた男の顔が現はれて、光に照らされたが、また深い處へどぶ／＼と沈んだ。ちぎれた腕が空中で搖れて、水の面に支へる物を見つけようとした。吾々は之等の腕を避けようとした。でなければ彼等は中へ引き込み得る者を死につれて行かうとするのである。

かゝる死のゴタゴタの中へ、唸き叫ぶ肺臟の中へ、眞紅な、恐れに撲たれた顏の喘ぎの中へ、榴散彈の雲は突入し、高い處から鐵の雹を飛ばせるのである。水はサッと立ち昇る。

そして再び！

爆發と叫喚、鉛の叫びと人の叫び、血と水は沸き返つて、何處で彼は打たれたか、彼はまだ生きてゐるか、誰もそれを知る者は無いのである。私の前に——摑む事の出來る程近く——私は頸靜脈管を見た。それは噴水のやうにアーチ形に噴き裂かれてゐる——其血に私はよろ／＼とする程撲たれた。血と怒號とは眞黑な水をたんのうせしめ、遂に人間の血でそれを紅くするに至つた——行け！行け！あたりを見廻すな！そこに——他岸がある！そこに生命が立つてゐて、吾々の方へ其手を擴げてゐる。行け！彼等が此沼澤で吾々を悉く殺し盡す前に！行け！行け！行け！あゝ！水が少くなつた！もう僅に臀までしか無い——もう膝までになつた。

やがて——

吾々の足は乾いた、祝福せられた土地に跳ね上り、あらゆる抑制をこへて前方に突き進み、そして野の上を走つた。彼等は如何なる命令にも從ふ事を拒んだ。彼等は走つた——吾々に惠みを垂れてくれる森の保護に向つて走つた。

そこだ！樹木の中へ、藪の中へ、荻の中へ、驀然に驅け込んだ。そこで彼等は死んだやうに地上に仆れ、其顏を地に埋めた。そして堅く眼を閉ぢて、吾々に裏切つて裂け飛んだ呪はれたる青い空を見まいとした。——犬め！獸め！後ろから吾々を打ち仆すなどゝは——卑怯な暗殺者と云はずして何と云はう。

靜かに息をつくと、意識が再び吾々に返つて來た。そして吾々の感覺が生き返つた時に、吾々は一人から一人とぼんやりした眼をして眺めた。之等の眼にはいゝといふやうな事は一つも前知されなかつた。

決して再び鎭める事の出來ないだらうと思はれる大きな、語る事の出來ない恐怖が、之等の眼の中に起つた。

新刊紹介

■火の娘（荒木郁著）

短篇小説『火の娘』、外五篇を收む。『火の娘』は妙な因緣話めいた、怪談めいたものといふ外、大した取り柄は無い。其の他も、皆いかにも短篇小説の型にはまつたもののみ。要するに料理屋もやれる、小説も書けるといふ、才を示したに止まつて居る。（金六十錢、神田區南神保町尙文堂）

■犧牲の女（深澤白人譯）

ウエデキントの短篇『犧牲』を譯したもので、歐文風に横組にした處が目新らしい。内容は隨分極どい處まで筆が進めてあるが、然も讀了後非常に嚴肅な感に打たれるのは、作者の態度がまた嚴肅な眞摯なものだからである。譯文は流暢輕快、寧ろ余り輕快過ぎる位ゐだ。同じ作者の『ラピ、エツラ』の譯、『肉の愛』を附錄とす。（金三十五錢、神田區南神保町泰平館）

■赤い花（谷崎精二譯）

露國の狂文豪ガルシンが作、『赤い花』、『臆病者』、『一夜』、『極く短かいロマンス』の四篇を譯したもので、多く狂人を題材として取扱ひ、着想描寫、悽愴として人に迫るものがある。就中、露土戰爭を題材とせる『臆病者』の如きは、國民兵士としての外、一個の人間として、同胞相鬩ぎ、人類相殺す戰爭を描寫せる點、同國の畫家ベレスチヤギンが精神にも通つて、眞摯なる感情、直ちに讀者の肺腑を衝くであらう。（金四十五錢神田區南神保町泰平館）

■サニン（武林夢想庵譯）

露國文壇の巨匠アルツイバシエフが傑作、人間自然の性情、性慾をば、忌憚なく描寫し、その本國の政府から發賣禁止を命ぜられた者である。大膽な偶像破壞主義、極端な異端主義、赤裸々な無道德主義、徹底せる反浪曼主義が、痛快辛辣に現はされて居る。之を要するに、サニン一卷を蔽へるものは、深奥なる虛無主義の思想であつて、男性的な野生と、剛健と、自由の感じは、一卷を通じて限りなく溢れて居る。夢想庵氏の譯筆、またよく原作の鮮明簡勁な印象を移して居る。但し、本書はその上卷だけである。（金九十錢神田區佐久間町植竹書院）（以上寒村）

■兄と弟（水上齊譯）

モオパツサン原著。何年か前に上村左川氏が文藝倶樂部に譯載したことがある。併し、これはモオパツサンの名が文壇に知られる前のことであつた。素より今日生命を有するものでない。モオパツサンの、溫籍なモーラルトーンの勝つた一面を傳ふべき此の作品が、水上氏の『瑕瑾なき』譯筆によつて、飜譯界に加へられたのは、慶ぶべきことである。而して、飜譯界が、水上氏を得たことも一の慶事である。卷頭には、モオパツサンの自序『小說に就いて』がある。敎へらるゝ所が多い。彼の創作の態度を知らんとするには最もいゝ材料である。（定價壹圓貳拾錢神田佐久間町四丁目植竹書院）

■青輪子句集（伊丹青輪子著）

句數五十三、素朴なる句あり、幼稚なる句あり、下手にひねつた句あり。（定價十五錢日本橋通四丁目青野書店）（以上貞雄）

消息

■白畫像社同人から『文科大學の外國文學專攻の者許り集つて、此度月刊雜誌「自畫像」を、尙文堂から出す事になりました。同人は虎介、幸雄、勘三、與郞、眞造、耕三、香、幹の八人です』云々といふ通信が來た。

■荒畑寒村は、パナアド・ショウの作物から、警句を集めて飜譯し、『ショウ警句集』と題して、三月上旬に泰平舘から出す。安成二郎も『女と惡魔』と題する、婦人に關する警句集を飜譯した。是れまた三月上旬に新潮社から出る。何れも本社で取次販賣する。

■故山本一藏氏の『飼山遺稿』は、最に原稿の整理を終へて、既に印刷に着手したそうだから、近々出版の運びになるだらう。因みに、同遺稿の出版に對する寄附金の締切は、三月一杯まで延すそうだから、遺稿の欲しい人は芝西久保八幡町十志村方深澤白人氏に御申し込みあれ。

■山口孤劍は夫人同伴、先頃上京して本郷區動坂に居を卜した。

寄贈雜誌

創造　中華民國　第三帝國　生活と藝術
未來　帝國文學　新公論　へちまの花
靑鞜　新佛敎　眞人道　實業之世界
新潮　モザイク　東洋哲學　人生と表現
民聲　新眞婦人　四千里外　ダイヤモンド
假面　現代詩文　關西藝術　ナショナル
創作　婦人評論　英語青年　早稻田文學
黎明　文章世界　公友新報　內外敎育評論
銀磬　東京評論　村落通信　東京魁新聞
學鐙　蛇の舌　新思潮　鑛業及鑛夫
河鹿　獨立評論　支那と日本　アマチュア
日本婦女新聞　日本エスペラント　自由評論

二月號目次

■定價一册金十錢、半年分前金五十五錢、一年分前金一圓。但し外國は別に一册金二錢宛の郵稅を要す。
■郵劵代用は五厘切手に限る。但し一割增の事。
■廣告料特別一頁十五圓、普通十圓。
■本社振替貯金番號東京一七一六三。

大正三年二月廿七日印刷納本
大正三年三月一日發行

府下大久保百人町三五二
近代思想社內
編輯兼發行人　大杉榮

府下大久保百人町三五二
印刷人　荒畑勝三

京橋區銀座四丁目一番地
印刷所　福音印刷合資會社
東京支店

大賣捌所　東京堂、上田屋、東海堂、北隆舘

若宮卯之助君著

（新刊）

一讀ヲ乞フ

一部五十五錢　郵稅六錢（四六判三百廿頁）

序

其の內容の、一たび公にされたと云ふに、度胸が据り。其の性質の知己を後世に待たざるに於て、氣輕になり。而して其の運命の、或は一月の後に、夜店の呼賣に上ることを覺悟の前に、敢て此の不滿足の書を著はしました。

大正二年十二月　若宮卯之助

目次

發行所　東京京橋區木挽町六丁目　ナショナル社
振替二四八九一番

生活と藝術

青年の中に同志を求む

同志を求む

三月號

定價拾八錢
郵稅壹錢

此一篇ら無名の青年の作品である。彼の序に依れば『背景は僕の自畫像の背景である。僕は是等の背景の中に住んでゐる從ってまたこの一篇は現代社會の一面相である』と。これらの背景に圍繞された一人の青年を想像してみることは、多少の興味を惹起さしめる事であると信ずる。

發行所　東京市日本橋區檜物町（振替東京五六一一四）　東雲堂書店

權威ある純女流文藝雜誌

青鞜

三月號

■定價 廿五錢 郵稅 壹錢五厘■

發賣所 東京市神田區南神保町一六【振替東京一九三四四番】 尙文堂

□青鞜社補助團は青鞜社の事業を完成せしめんが爲經濟上の補助をなすを以て目的とす。
□甲種會員 一ヶ月會費 壹圓
□乙種會員 一ヶ月會費 五拾圓
□會費は大凡二ヶ年間確實なる銀行に預金し、其後に於て全金額を青鞜社に寄附するものとす。青鞜社はこれをもつて出版事業を開始す。
□本團は會員に對し青鞜社發行の機關雜誌「青鞜」を每號贈呈す。
□甲種會員には會費全納後二ヶ年間雜誌

春期會員募集

青鞜社補助團

「青鞜」を贈呈する外に、二ヶ年間に於ける青鞜社出版の圖書を其都度贈呈す
□乙種會員には滿二年間雜誌「青鞜」のみを贈呈す。
□本團員は甲、乙に拘はらず女子に限りて「青鞜」に寄稿し得るの特權を有す。但寄稿が二回以上「青鞜誌上」に掲載されたる場合は本人の希望により相當の手續を經て青鞜社の社員たる事を得。
□入會申込希望者はハガキにて府下巣鴨町一一二二七青鞜社內補助團宛申込まるべし。

第二卷第三號
三月一日發行
定價卅錢

エゴ

第三月號

發行所　東京市小石川區西江戸川町九　日本洋書協會
編輯所　東京市牛込區新小川町三丁目千家方　エゴ社

假面

定價三十錢

郵稅金二錢

第三卷第三號 三月號

挿書 青騎士派 カンジンスキイ フランツ・マルク 木版畫五圖!!

發行所 東京市外西大久保二百三十一 假面社

發賣元 東京神田錦町一丁目十九 中興館 振替東京四一二三番

近代思想
第二卷第六號
大正元年十月一日第三種郵便物認可毎月一回一日發行
大正三年二月二十七日印刷納本（大正三年三月一日發行）
三月號
金十錢



大正三年二月二十七日印刷納本（大正三年三月一日發行）

三月號

金十錢

近代思想
第二卷第六號
大正元年十月一日第三種郵便物認可　毎月一回一日發行
（大正三年二月二十七日印刷納本　大正三年三月一日發行）
三月號
金十錢

